地域に生き世界に伸びる

阪大Now

OSAKA UNIVERSITY

No. 84　2005. 8

No.84

2005.8

目　次

トピックス …… 3
クローズアップ …… 4
役員室だより …… 8
ナウスペシャル …… 14
キャンパスニュース …… 16
表 彰 等 …… 32
記念講義 …… 36
人　　事 …… 39
名誉教授リレー随想 …… 42
名誉教授の近況 …… 44
訃　　報 …… 46
インフォメーション …… 47
インタビュー …… 52
海外レポート …… 54
私の本棚 …… 58
ガイドマップ …… 59
交流協定大学紹介 …… 60

〈表紙解説〉マチカネワニ発掘時のイラストと復元模型

1964年、大阪大学理学部の新校舎建設工事現場から発見されたのが、マチカネワニの化石です。化石が見つかったのは約40万年前の地層でした。イラストは、その発見状況を示したものです。マチカネワニは頭を南に向けた状態で埋まっていました。骨だけでなく、鱗や胃石などもあり、ワニは死後まもなく、皮や肉が腐敗しきる前に埋没したものと考えられています。マチカネワニの体の方向と、いっしょに出土した木材の方向が一致しており、水流に押し流されながら沈み、川底の泥の中に埋まっていったようです。ワニの化石全身復元模型は総合学術博物館（イ号館）に陳列中です。胃石やワニと一緒に発掘された貝の化石も待兼山修学館に陳列中です。

（総合学術博物館教授　泉　万里）

阪大Nowのリニューアルにあたって

広報委員会委員長　**西　尾　章治郎**

残暑お見舞い申し上げます。2004年4月に委員長に就任して以来、各部局、教職員のご協力の下、広報委員会では、大阪大学の広報活動、情報発信の充実を推進してまいりました。

昨年4月には、大阪市街地における情報発信拠点、中之島センターがオープンし、センター1階に情報サービス・展示コーナーを開設しました。大阪大学が発行する様々な刊行物を展示し、センター利用者、卒業生、一般市民の方々に大学の教育研究活動状況、各種案内、歴史や沿革などを広く情報提供しています。また、今年5月には、公式Webページをリニューアルし、より見やすく、使いやすくしました。公式Webページは、昨年1年間で23万件を超えるアクセスがあり、大学広報の中心的な役割を果たしています。

さらに今年度は、地域連携、産学連携のための広報の強化、充実に取り組んでいくこととしています。「地域に生き世界に伸びる」を標榜する大阪大学が吹田市、豊中市をはじめとする自治体や近隣地域へ活発な広報活動を展開するとともに、一方で共同研究や研究交流を推進する企業や研究機関と双方向の連携協力をサポートするための広報活動、情報発信を強化していく必要があります。このような中で広報誌の果たす役割は重要だと考えています。このため、8月号から「阪大Now」を全面的にリニューアルすることとしました。

今日のようなインターネット社会にあっては情報に対する読者のニーズも大きく変化しています。つまり、「過去の情報よりも将来の情報」を提供するという広報姿勢が求められているということです。これまでの阪大Nowは、学内の出来事を記録して残すということに重点が置かれていました。このため、最新情報の提供、読者を意識した広報という視点は欠けていたように思われます。今回のリニューアルでは、こういった点を全面的に見直し、タイムリーな記事をより読みやすく、読者のニーズに応える紙面づくりを心がけました。

大学の広報は生命線であると言われます。大阪大学から生きた情報が学内外に発信され続けるよう努力したいと思います。教職員、学生の皆さんのご意見、ご要望を是非お寄せください。

帰ってきました!大阪大学

天神祭　船渡御に初参加

7月25日(月)、大阪市内を流れる大川であった天神祭の船渡御に、大阪大学が初めて参加しました。昨年4月、大阪市中之島の旧医学部跡地に中之島センターが開設したことから、「帰ってきました！大阪大学」がキャッチフレーズです。学生から名誉教授まで約200人が船上から“大阪市民”として戻ってきた大阪大学をアピールしました。

阪大船が大川を下り始めて間もなく、各学部ごとに分かれていた同窓会をまとめた「大阪大学同窓会連合会」の発足式が船上で行われました。応援団とチアリーダー14人が祝いの演舞を披露し、河岸や橋の上に集まった大勢の観客の注目を集めました。

江戸時代、大坂町人文化が生んだ懐徳堂・適塾を源流とする大阪大学が、大阪市内から豊中市、吹田市へキャンパスを全面移転してから、大阪市民にとって阪大は少し遠い存在になりました。しかし、市民講座などを軸とし、市民、社会との連携を重視する中之島センターの開設で、再び阪大は市民の身近な存在になろうとしています。「学問の神様のお祭りに、大阪大学が参加しないのはないでしょう」と、法被姿の宮原秀夫総長。鷲田清一副学長も「大学こそ街の中へ戻らないと」と、参加の意義を語りました。

約2時間半の船渡御では、浴衣姿の留学生も「打ちまーしょ」の大阪締めで、すれ違う船と交歓。軽音楽部の演奏するジャズが流れる中、夜空に咲いた花火に歓声が上がりました。

中之島センター開設を機に
200人が船上から“帰郷”をアピール

ようこそ博物館へ

CLOSE-UP

総合学術博物館教授　泉　　万　里

総合学術博物館は豊中キャンパスのイ号館に、マチカネワニや待兼山および中之島センター敷地から出土した筒型埴輪や土製の玩具などを陳列した展示室と、鉱物岩石標本の第2展示室とを公開しています。そして、さらにこの8月から、石橋駅から豊中キャンパスへ向かう「阪大坂」の登り口にある、待兼山修学館1階の3室に、旧教養部に半世紀以上眠っていた標本類を整理して、史料準備館としてあらたに公開いたしました。

まず、あたらしく始まったばかりの待兼山修学館の展示室からご案内いたしましょう。

これが、待兼山修学館です

写真1　待兼山修学館正面（外観）

写真2　ステンドグラス

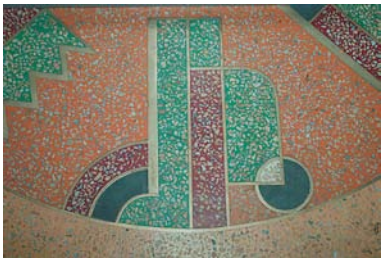


写真3　床面タイル

たぶん、阪大関係者であっても、建物内に入ったことがあるという人は、そう多くはいないと思いますので、最初に待兼山修学館〔写真1〕のご紹介を簡単にしておきます。

この建物は、1931年（昭和6年）に大阪大学医学部の前身である、大阪医科大学の附属病院石橋分院として建てられたものです。「各種疾病の回復期、その他郊外に転地を要する患者の療養のために、大阪市よりあまり時間を要せざる山紫水明の地」である石橋を選んで建てられた、と記録にあります。石橋が「山紫水明の地」とされていたことに驚かされますが、その後、1997年（平成9年）3月までは、大阪大学医療技術短期大学部の校舎として使われてきました。

もともと、病院として建てられた建物ですが、窓のステンドグラス〔写真2〕や、床のタイルの装飾〔写真3〕などに、20世紀はじめに一世を風靡したアール・デコ風のしゃれたデザインが採用されています。療養生活にすこしでも潤いを、という設計者の配慮でしょう。

さて、待兼山修学館の展示室は、3室あります。

そこに並べられている標本の大部分は、1926年（大正15年）に設立された旧制浪速高等学校の所蔵品です。旧制高等学校の教材として活用されていたものです。化石標本には、マチカネワニが発見されたときにワニの化石といっしょに出土したものも含まれています。

第1展示室からご案内しましょう。

●第１展示室

写真４　第１展示室全景

第1展示室では、動物の剥製、骨格標本と化石標本〔写真4〕を陳列しています。

剥製では、カササギ２点とパラオ産のミノバトなどが比較的珍しいものといえるでしょう。骨格標本は脊椎動物の主要群が一応そろっています。モグラとアブラコウモリの全身骨格と、イヌとウシの頭骨がかなりの数あるのは、実習用教材として複数個そろえる必要があったのかも知れませんがよくわかりません〔写真５〕。

化石の陳列のコーナーの１部分に、マチカネワニとともに出土した化石を並べてあります。二枚貝やナガタニシ、巻貝などとともに、ワニの歯や胃石かと思われる化石です。二枚貝の化石などは、掘り出したままの状態で、切り出した泥がそのままついています〔写真６〕。これらはワニがどんな環境に住んでいたのかを知る重要な手がかりです。

写真５　なぜかたくさんあるモグラの骨格標本

写真６　マチカネワニとともに出土した化石
胃石（右上）、歯（左上）、二枚貝（下段）

●第２展示室

写真７　第２展示室全景

写真８　ホシムシ、ホウキムシ、
スジホシムシ

写真９　タイワンコブラ

ここには、戦前に島津製作所などにより作成された動物のフォルマリン液浸標本が陳列されています。1995年（平成７年）の阪神淡路大震災でかなりのものが破損してしまいましたが、難をのがれた標本を主体に、旧教養部の生物系の教員（越田豊氏、常木和日子氏）によって採集された標本もまぜて陳列しています。液浸標本の見所は、以下の３点です。

写真10　タランチュラ

写真11　サソリモドキ

1．一般にはあまり知られていない海産無脊椎動物群の標本（ホシムシ、ヒゲムシ、ホウキムシ、スジホシムシ、シャミセンガイ、ヤムシ、ウミユリ、ギボシムシ、ナメクジウオなど）〔写真８〕をみることができます。なんとも形容しがたい不思議な形の生き物ばかりです。

2．爬虫類を中心として、台湾やいわゆる南洋産の標本（トビトカゲ、メクラヘビ、タイワンコブラ〔写真９〕、タイワンハブなど）が含まれています。かっと大きく開いたヘビの口にはガラスの正方形の板がはめこまれています。

3．外国産の珍しい陸産動物の標本（カギムシ、タランチュラ〔写真10〕、キョクトウサソリ、アシナシイモリなど）

もあります。サソリモドキ〔写真 11〕は沖縄で採集された標本のようです。いずれも、いかにもまがまがしい迫力のある色と形をそのままとどめた標本です。

●第3展示室

写真 12　第 3 展示室全景

写真 13　考古遺物の標本

日本が戦争へと向かっていった時代の、地理・歴史教育の一端を知ることのできる標本教材がこの部屋には陳列されています。日本の優れた文化遺産と、優秀な産業・技術の紹介に大変熱心であったことが窺えます。

標本の多くは、島津製作所標本部の製品です。島津創業記念資料館には、このような標本を販売する営業マンが携えていた

写真 14　時代別・身分別日本人標本

写真 15
モデルは豊臣秀吉か？

写真 16　装束人形。ただし「並製」

営業用パンフレットが保存されており、標本の監修者や価格がわかるものもあります。（『地理及歴史学用標本目録』大正 3 年発行・『目録　地理と歴史』昭和 5 年発行　昭和 10 年訂正三版）

日本の文化遺産の標本の多くは考古遺物の標本です〔写真 13〕。

埴輪や、瓦、そして馬具や土器、銅鏡、経筒などの器物類の模造品。大きさは、実物大から縮尺したものまでさまざまですが、紙、粘土（素焼き）、金属などの素材を用いて「正確ニシテ根拠アル実物ニ」基づいて作られたものであるとされています。甲冑の標本など、持ち上げたとき、拍子抜けするくらい軽く、紙の張子とはとてもみえないできばえに驚嘆させられます。

さらにさまざまな種類の人形の標本があります。そのなかのひとつが時代別・身分別日本人標本〔写真 14〕です。

人間を、その身体も含め、時代や「身分」によって類型化する人形標本には、身分制度や、「日本人」という単一民族が古代から現在まで連綿と続いているという考えかたを無批判に助長している点に問題があるものですが、過去の歴史教育の遺物という意味で資料的価値のある標本と考えて陳列してあります。

そればかりでなく、造形的にみて、たとえば、「安土桃山時代貴族男子」とされる成人男性の標本の、極端に皺の多い顔〔写真 15〕には、「猿」とあだ名をつけられていた秀吉のイメージが重ねられているように思えます。製作者のひそかなこだわりが、そこにこめられているのかもしれません。

巨大な雛人形みたいな装束人形〔写真 16〕は、「恩賜京都博物館（現京都国立博物館）学芸委員猪熊浅麿先生検閲」とうたわれ、日本の歴史的装束の故実にのっとった着用の様子がわかるように作られています。島津製作所製のものには、並製と上製とがあり、並製で 1 体 35 ～ 70 円程度、衣装の着脱ができる上製では 110 円という価格がついています。ここにあるのは着脱させることのできない、並製の装束人形です。

写真 17　漆器標本

「殖産興業」の掛け声がかまびすしい時代には、国内産業にたいする知識を教えることも、旧制高等学校教育の一部であったようです。そのための漆器、陶磁器標本〔写真17、18〕もあります。

島津製作所のパンフレットには、1894年（明治27年）より、各府県庁に依頼して、その管内の信用ある業者を紹介してもらい、それらの業者によって各地の特産の工芸品を収集してそれをこのような木製の箱に詰めて標本として売ることを始めたと記されています。

写真18　陶磁器標本

イ号館内展示室へもどうぞ

写真19　イ号館第1展示室

写真20
マチカネワニ
頭部化石

写真21　土製玩具

待兼山修学館から阪大坂を登りきったところにある古風な建物がイ号館です。旧制浪速高等学校の校舎として1928年（昭和3年）に建てられて以来、現在にいたるまで「学舎（まなびや）」として生き続けている建物で国の登録有形文化財に指定されています。イ号館内に設けられた博物館展示室2室には、マチカネワニ化石〔写真20〕と、キャンパス敷地などから出土した埴輪、それに鉱物岩石標本が陳列されています。

マチカネワニ化石についての報告書は、展示室入り口に置いてあります。ご自由にお持ち帰りください。マチカネワニについての研究は、現在も進行中です。展示室には大きなワニの復元模型もあります。ほんとうは、尻尾はここまで長くなかった、という声もありますが・・・・。

大阪大学中之島センターの敷地から出土したのが、土製玩具〔写真21〕です。なんとも愛らしい小さな素焼きの人形や馬、塔、鳩笛など、数点あります。江戸時代のものでしょう。

鉱物岩石標本室〔写真22〕では、鉱物や岩石を並べて見ることによって、その色や形の多様性を実感させられます。「砂漠のバラ」〔写真23〕と美しい名前で呼ばれる鉱物や、鮮やかな色のもの〔写真24〕、不思議な形のものなど、じつにさまざまなものが並べられ、近畿圏では有数の規模を誇っています。

ごく最近、大きな問題となっている石綿が天然鉱物であることは意外に知られていないように思われます。各種石綿をまとめて陳列しました。いうまでもありませんが、ガラス瓶およびガラスケースに入れてありますので、安全です。

写真22　イ号館第2展示室

写真23　「砂漠のバラ」

写真24　孔雀石（緑）・藍銅鉱・
菱マンガン鉱（ピンク）

以上が、大阪大学総合学術博物館の現状の展示のご案内です。ぜひご観覧ください。

また、博物館では、9月18日から25日まで、中之島センターにて

第4回　企画展「時空のなぞ ―アインシュタイン・イヤーによせて―」

を開催いたします。レクチャーや展示解説などは18、19、23、24、25日に行いますので、こちらへも、どうぞご来場ください。

いずみ・まり　プロフィール

1957年生まれ。日本美術史（中世絵画史）専攻。大阪大学文学部助手、神戸市看護大学助教授を経て、2005年4月から現職。

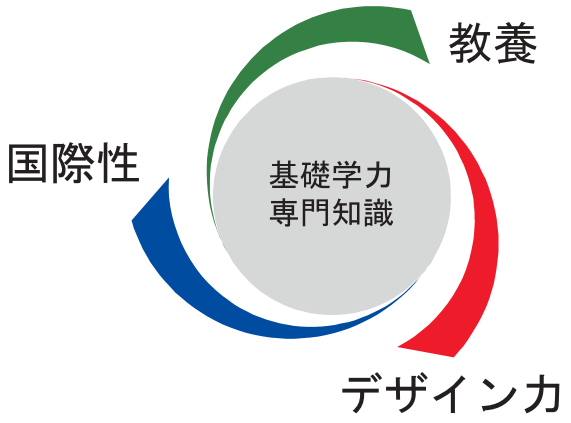
役員室だより

2005.8　Vol. 7

平成18年度の概算要求（案）は6月下旬に文部科学省に提出し、7月8日には文部科学省において概算要求（案）に関する説明を行いました。

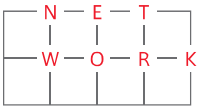
今年の概算要求事項数は、特別教育研究経費の継続事業で11件、新規事業で18件（設備更新5件を含む）、施設整備費補助金で8件（新規）、医学部附属病院・歯学部附属病院設備の財投での要求が10件でした。

法人化後の概算要求の説明にあたっては、大学としての将来構想、基本方針に基づいた説明をする必要があります。昨年同様今回も、教育目標として掲げた「教養、デザイン力、国際性」、研究推進のキーワードとして掲げた「インターフェイス」と「ネットワーク」に基づいた説明を行ってきました。ここで、研究推進の基本方針をどのように説明してきたかについて簡単に触れておきます。



まず、**インターフェイス**という言葉には、異分野の融合や連携により、常に新しい学問領域を生み出していくという気持ちを込めていることを強調いたしました。次に、**ネットワーク**という言葉には、沢山の学問領域が有機的に連携してどんどんと新しい学問領域を創成していくという気持ちと社会などからの多様な要請・要望に迅速に応えうる柔軟な研究組織を構築するという気持ちを込めているとともに、学内における連携のみならず、産学連携、市民や社会との連携すなわち社学連携、さらには国内外の国公私立大学・研究所との連携なども含めていることを説明いたしました。「連携」と言う点では、協奏曲の協奏すなわち力を合わせて奏でる、“協奏”という精神での連携を強調いたしました。すなわち、協奏曲ではそれぞれ個性を持った楽器が力を発揮して初めてすばらしいハーモニーが生まれるように、皆で渡れば怖くない方式の形式的な横並びの連携ではなく、個性あるもの同士がそれぞれの役目を十分に発揮した連携が重要であることを説明いたしました。最後に、最も重要なこととして、研究者の自由な発想に基づいた基盤研究が大阪大学における研究の根底にあることを強調いたしました。次年度の概算要求を考えるにあたっての参考にして頂ければと思います。

インターフェイス



ネットワーク

また、中期目標・中期計画に基づく年度計画の進捗状況を記載した「平成16年度業務実績報告書」を6月末に文部科学省に提出しました。7月21日には、国立大学法人評価委員会の専門委員によるヒアリングが行われ、関係理事4名が出席し、説明をしたところです。今回のヒアリングでは、法人化初年度に当たる平成16年度に各大学で法人化への移行が円滑に実施されたか、業務運営面において法人化のメリットがどのように生かされているかを経営、財務、監査、教職員の意識等の観点から質問がありました。特に経営戦略、資源配分等に総長の意思決定がどこまで反映されているか、内部・外部監査機能が十分働いているかなどはほとんどの大学に共通して質問されているとのことです。法人化後各大学が自主性、自律性をもって運営されているかが評価のポイントになると考えられます。さらに、平成17年度以降は教育・研究についても中期目標・中期計画に沿って年度計画がどこまで達成されているか評価されることになると思いますので、今後達成状況、成果がきちんと説明できるよう全学で準備していく必要があると考えます。

各室の検討状況

総合計画室

全学同窓会連合会

全学同窓会の組織化については、同窓会連合会（仮称）設立検討 WG での検討状況を 7 月 19 日に部局同窓会代表者に説明し、WG で打ち出した基本方針を了解して頂きました。それを受けて、部局長会議での説明、役員会での了承を経て、7 月 25 日の天神祭船渡御の船上で、連合会会長の熊谷信昭元総長の音頭のもとに連合会が産声を上げました。この同窓会連合会については、キャンパスニュース（16 ページ）で詳細に報告させていただきます。

男女共同参画に関する検討ワーキング

男女各 4 人の委員で構成され、7 月 26 日から第 1 回目の検討を開始しました。ワーキングでは、他大学における取組状況等も参考にしながら、本学の実状と問題点を把握、整理し、

①男女共同参画に関する対応方針（案）の策定
②学内保育施設の在り方
③常設委員会の設置

を中心に検討を進めていくことにしています。

まきば保育所

たけのこ保育園

施設マネジメント委員会

キャンパスデザイン室では、助手の公募をしておりましたが、その選考が終わりました。今後、4 月 1 日着任の木多助教授と 7 月 1 日着任の大谷助手の 2 名には、キャンパスデザイン室の専任教員として施設マネジメント委員会および施設部と連携しながら大学全体としての計画的キャンパス整備等に関わって頂きます。

総合計画室の下に置かれていた「新たな施設整備手法に関する検討 WG」については、今後は施設マネジメント委員会の下の WG と位置づけ、WG の先生方にはキャンパスデザイン室の兼任教員となって頂き、専任教員と協力して新しい整備手法を検討して頂くことになりました。

教育・情報室

文部科学省による教育改革ならびに教育支援のためのプログラムの採択結果

文部科学省による教育改革のプログラムの公募につきましては、各部局より多数の応募をいただきましたが、その採択結果が一部公表されました。

現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）につきましては、「国際的な人材養成に資するコンテンツの開発」（代表：福井希一工学研究科教授）が採択されました。また、大学教育の国際化推進プログラム（海外戦略）につきましては、「融合科学を国際的視野で先導する人材の育成」（代表・西尾章治郎情報科学研究科長）が採択されました。

大学・大学院における教員養成推進プログラム（教員養成 GP）、地域医療等社会的ニーズに対応した医療人教育支援プログラム、「魅力ある大学院教育」イニシアティブ事業（創造性豊かな若手研究者養成のための重点的支援）の採択結果につきましては、公表されしだい本欄でお知らせいたします。

全学共通教育の特別時間帯設定の検討

大阪大学はその教育目標として「教養」「デザイン力」「国際性」の育成を掲げておりますが、これらの育成は一定程度専門課程の学習をおこなっている学生にこそ必要なものです。そのために全学の共通教育を担う大学教育実践センターとコミュニケーションデザイン・センターは、全学共通教育科目の学部高学年配当、ならびに連続講義「科学と社会」や科学技術コミュニケーター養成講座や医療コミュニケーション・トレーニングをはじめとする講義や対話ワークショップの大学院配当を計画しております。これらの教育プログラムは、全学の学部・大学院の時間割のなかで共通教育枠を設定することなしに実現は不可能です。そこで教育課程委員会でこの共通教育枠をどのように設定すればよいか検討いただくことになりました。大阪大学に所属する学生の資質向上のため、全部局のご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

研究推進室

スーパー産学官連携本部事業に採択

文部科学省は、わが国の大学に国際競争力のある産学官連携体制の構築や組織的な共同研究の推進、積極的な民間資金の獲得を目指すため、平成 17 年度より新たに、大学知的財産本部整備事業の一環として「スーパー産学官連携本部」をモデル事業として整備することとし、応募 23 機関から、書類審査、ヒアリング審査の結果、本学を含め 6 機関（東京大学、東京工業大学、東京農工大学、京都大学、大阪大学、奈良先端科学技術大学院大学）を採択しました。

本学の提案は「インダストリー・オン・キャンパス構想」をキャッチフレーズに、共同研究講座制度の導入、基盤技術の産業化に向けたバリューチェーンの構築などの独創的な試みにより、大学に産業創出拠点を目指しています。

産業界で活躍するリーダー人材の育成、共同研究の国際化・海外産学連携拠点の整備、契約実務サポート体制の充実などを含め、企業からの投資意欲を引き出す実践的な活動を進め、産学官連携共同研究の質的拡大を目指します。

大学院学生対象の研究支援事業

海外の大学ならびに研究機関に数ヶ月滞在する短期研究留学に対し、研究活動を支援し、国際性豊かで創造的な研究開発活動を独力で展開できる若手人材を育成するため、博士後期課程学生に対し、大阪大学教育研究等支援事業経費より旅費ならびに滞在費（1 件 100 万円を上限、年間 15 件）を援助する研究支援事業を発足することとしました。

今後、募集並びに審査方法の詳細については国際交流本部と連携し、検討を進め、お知らせします。

科学研究費補助金交付決定

平成17年度科学研究費補助金の交付が決定しました。本学は、新規採択並びに継続分を含め、採択件数1627件、配分総額は82億6247万円（直接経費74億7840万円、間接経費7億8417万円）であり、配分総額は東京大学、京都大学についで全国3位でした。今後とも、予算獲得に向けて研究者各位の更なる努力が必要と考えています。

評価・広報室

年度業務実績報告書の公表

6月末に、平成16年度業務実績報告書を文部科学省国立大学法人評価委員会に提出し、7月21日には同委員会評価チームによるヒアリングが実施されました。評価結果（案）が8月下旬にまとめられ、大学への意見照会（意見申立の機会）を経て、9月下旬以降に評価結果が公表される予定です。

同報告書についてはホームページに掲載しています。また、同報告書における大学全体の自己評定は次のとおりです。

項目	年度計画数	進行状況（自己評定）			
		Ⅳ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ
Ⅱ 業務運営の改善及び効率化に関する目標	47	3	44		
1 運営体制の改善に関する目標 No.164)～178)	15	1	14		
2 教育研究組織の見直しに関する目標 No.179)～184)	6		6		
3 人事の適正化に関する目標 No.185)～204)	20	2	18		
4 事務等の効率化・合理化に関する目標 No.205)～210)	6		6		
Ⅲ 財務内容の改善	16	5	11		
1 外部資金その他の自己収入の増加に関する目標 No.211)～219)	9	5	4		
2 経費の抑制に関する目標 No.220)～223)	4		4		
3 資金の運用管理の改善に関する目標 No.224)～226)	3		3		
Ⅳ 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供	12	1	11		
1 評価の充実に関する目標 No.227)～234)	8	1	7		
2 情報公開等の推進に関する目標 No.235)～238)	4		4		
Ⅴ その他業務運営に関する重要目標	31	5	26		
1 施設設備の整備等に関する目標 No.239)～258)	19	2	17		
2 安全・衛生管理に関する目標 No.259)～270)	12	3	9		
合計	106	14	92		

自己評定　Ⅳ 年度計画を上回って実施している　Ⅲ 年度計画を順調に実施している
Ⅱ 年度計画を十分に実施できていない　Ⅰ 年度計画を実施していない

全部局を対象に基礎評価（試行）を実施

昨年度は、一次試行として4部局を対象に基礎評価を実施しましたが、本年度は、二次試行として全部局を対象に実施し、その整備を図ることとしています。「基礎評価の流れ」については、7月の部局長会議で説明し、文書でも各部局にお知らせしておりますが、詳しくは9月中に実施要項を整備した上で改めてお知らせします。9月末には、各部局（部局長会議の構成部局）から選出いただいた評価員に対する説明会を開催し、10月から「基礎評価シート」による自己点検・評価をお願いする予定です。

吹田市との連携協力

広報委員会では、今年度の広報活動の主要事項の一つとして掲げている地域推進の強化のため、吹田市役所1階に、阪大情報コーナーを8月1日から開設しました。

吹田市と阪大は、同市が推進する「大学のあるまちづくり」事業の連携協力を昨年10月に締結しており、地域・市民に阪大の情報を積極的に提供をしようと考えています。

詳細は、インフォメーション（47ページ）をご覧ください。

財務・会計室

平成16年度決算

法人化後、初めての決算でありましたが、どうにか無事に決算業務が終了し、6月に文部科学省に財務諸表等を提出しました。

今後、財務諸表等について、文部科学大臣の承認があり次第、広く公開する予定です。

資本剰余金の取り扱い

附属病院においては、最先端医療の提供や地域中核病院としての役割を果たすとともに医療の質と安全の確保のための医療設備の計画的な整備に取り組む必要があり、本学では、この中期計画期間中においては、附属病院収入の増収部分により医療設備の整備充実を図ることを可能としました。

しかしながら、各附属病院における医療設備の整備計画が、緊急を要し、かつ、多額な資金が必要であり、このため、法人化の移行時において、国から本学に承継された附属病院収入に起因する資本剰余金の一定額を附属病院の医療の質・安全性の担保、並びに収益確保のための医療設備の整備充実に充てることとしております。

人事労務室

兼業の範囲の拡大

従来、教員について、営利企業の監査役等を役員兼業として許可することが可能でしたが、これに加え、新たに「社外取締役」を許可できることとしました。

（平成17年6月20日実施）

労働者災害補償制度における給付額の改定

本年4月から、国家公務員の「障害特別援護金」の額が増額改定されたことを勘案し、本学においても、同様の改善（法定外障害補償の増額改定）を行うこととしました。

（平成17年4月1日実施）

外部資金による任期付常勤教員の雇用に関する対象資金の拡大

外部資金による任期付常勤教員の雇用は、委任経理金、21世紀COE、科学技術振興調整費について認めてきましたが、今回「新興・再興感染症研究拠点形成委託費」「大学国際戦略本部強化事業委託費」による雇用も認めることとしました。

（平成17年7月25日実施）

勤務時間の適正な管理の徹底

職員（管理監督者及び裁量労働制の適用を受ける教員を除く。）ついては、より厳正に管理する観点から、職員自身が「勤務時間等記録簿」に始業時刻及び終業時刻を記入すること並びに管理監督者等（補助者を含む。）による現認により勤務時間管理を行うこととしました。

なお、詳細については、大学のホームページに関係の通知を掲載していますので、参照して下さい。

（平成17年8月1日実施）

役員の報酬等及び職員の給与水準の公表

国立大学法人法の規定に基づき、本学の役員報酬及び職員給与水準の公表を行いました。

（平成17年6月30日公表）

国際交流推進本部

アドバイザリー・ボード第２回会議

６月10日(金)大阪大学中之島センターにおいて、「大阪大学の国際交流に関するアドバイザリー・ボード」の第２回会議が開かれました。今回、ご出席いただいたのは次の方々です。(敬称略)

シャープ㈱常任顧問	新本　孫宏
野村ホールディングス㈱取締役会長	氏家　純一
前JICA青年海外協力隊事務局長	金子　洋三
NHK「ビジネス英会話」講師	杉田　敏
前世界銀行副総裁	西水美恵子

なお、松下電器産業㈱技術特別顧問の三木弼一氏は、日程の都合で出席できませんでした。大阪大学からは宮原秀夫総長はじめ国際交流推進本部員など12名が出席しました。

そこでの論点を次の２点にまとめました。

(1) 日本の留学生政策

これまで日本の留学生政策が「留学生受入れ10万人計画」に基づき、留学生の受け入れ数の増加を目標にしてきたことに対して、今後は優秀な留学生を受け入れる方策を考えることの重要性が論議されました。

特に中国においては国内の技術教育の水準が上がってきているし、中国学生の英語力、日本語力ともに伸びてきているので、中国国内の大学出身者で日本企業に採用された者が日本に留学した者に比べて遜色がないという厳しい指摘もありました。優秀な留学生を受け入れるため、特定の相手先大学を決め、そこから推薦された者は無条件に受け入れているというアメリカの大学の例も話されました。ただ、日本の制度の下では、大学が留学生を選考したり、学内の受け入れ体制を改善していくことなどにおいて、大きく制約されているのが実情であると、大学側から指摘がありました。

日本での留学を、留学生にとっても大学にとっても有意義なものにするするために、制度的障害になっているものが何であるかを見つけ出し、それを解決していくことが重要であると結論付けられました。

(2) 国際化時代の教育

ここでは英語教育の問題から始めました。阪大では大学教育実践センターと言語文化研究科で実施しているTOEFL－ITPの結果と分析を中心に議論されました。TOEFL一辺倒の考えに対して、アメリカにおける留学生の入学選抜において、TOEFLというような数量的評価を重視することに対する批判のあることが、まず指摘されました。また、ビジネスの世界では英語は重要であること、リスニングよりもスピーキング、さらにはbad Englishであっても自分の考えることをしゃべれる力の重要性が話されました。TOEFLについては、全員の得点を上げることよりも、ある程度力のある学生にインセンティブを与え、さらなる向上を図ることを考えてみたらという意見も出ました。

続いて国際社会で働いていくためには、リーダーシップ、仕事に対する情熱、異文化の人の意見を聞く能力、さらには、英語はうまくなくても伝えたい意気込みが重要であるといった意見も出ました。

こうしたご意見を、大阪大学の国際交流推進に反映させていきたいと思います。

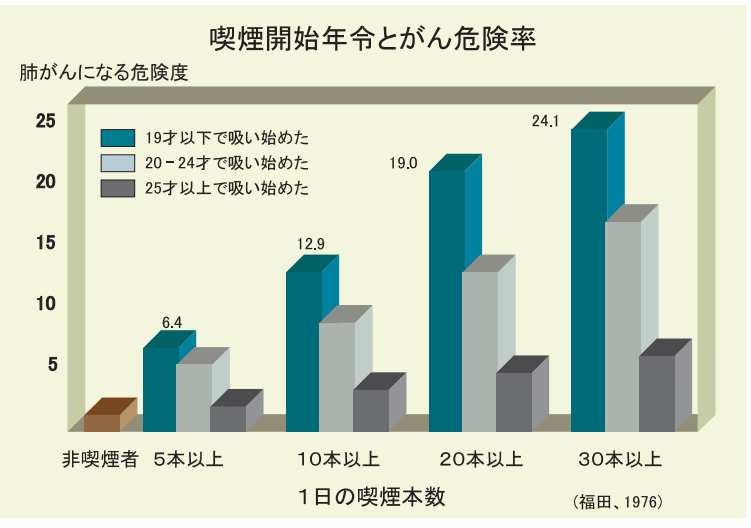
たばこと健康

キャンパス禁煙最前線

保健センター助教授　瀧原　圭子

大阪大学では、平成17年4月より建物内全面禁煙が実施されました。平成15年5月に健康増進法が施行され、多くの人が利用するような場所では建物内での受動喫煙防止の措置が施設管理者に義務づけられ、禁煙または完全分煙でない場合は法律違反となりました。大学も含めた学校等の教育機関は、医療機関とともに受動喫煙防止の対策をしなければならない施設として真っ先に上げられ、これまでに全国の体育および健康系の大学／学部、教育大学や女子大学で敷地内禁煙あるいは全館禁煙が進められてきました。関西では大阪府立看護大学、神戸薬科大学、甲南女子大学、神戸親和女子大学など、全国では33の大学がすでに敷地内禁煙を実施しています。国立の総合大学においては、このような取り組みはややもすると遅れていましたが、本学では約1年前に医学部と歯学部において館内禁煙が実施され、今回ようやく全学部で取り組むことになりました。

日本人の成人喫煙率は24%ですが、男性の喫煙率は46.8%と先進国で最も高く、また同時に禁煙に対する取り組みに関しても日本は「後進国」といわれています。ヨーロッパでは、アイルランド、イタリアに続いて今年からはスウェーデンなど5カ国がレストランやバーなどの屋内において全面禁煙になっています。我が国では、ようやく今年の4月からたばこの広告がテレビのCMや街角から消えました。また、7月以降すべてのたばこの箱に「喫煙は肺がんの原因の一つとなり、心筋梗塞、脳卒中、肺気腫を悪化させる危険性を高めます」という文章が印刷されることになりました。これまでの「健康を損なうおそれがあります」からみると、かなり踏み込んでたばこの害を強調した文章になっています。しかしながらたばこの自動販売機は街にあふれ、全国で62万台、国民200人あたり1台という数字は米国の40倍に達し、キャンパス内にも設置されています。自動販売機は未成年の喫煙に大きな影響を与えると言われており、喫煙経験のある中高生の7割が自動販売機でたばこを入手しています。



大阪大学　学生（平成17年度）／職員（平成16年度）の喫煙
―定期健康診断におけるアンケート調査より―

	非喫煙者	禁煙者	喫煙者	喫煙者（%）
学　生　(14,545名)	12,393名	430名	1,415名	7.9 %
職　員　(4,485名)	2,445名	1,077名	384名	8.6 %
男性　(2,346名)	2,066名		280名	11.9 %
女性　(2,139名)	2,035名		104名	4.9 %

大阪大学　保健センター

厚生労働省の統計によりますと、高校3年生男子の約50%に喫煙経験が有り、約26%が毎日の喫煙習慣をもつと報告されています。未成年の喫煙はがんによる死亡率を著しく高めることが知られており、医学的観点だけでなく教育的観点からも大学は禁煙プロジェクトに取り組む必要に迫られています。これまで大学のキャンパスは「喫煙天国」ともいわれていましたが、このような中で、全国の大学を禁煙化し大学生を非喫煙者として社会に送る「大学禁煙化プロジェクト」が、奈良女子大学を中心として平成15年秋から動き始めています。この中には、「大学生禁煙化」「大学教職員禁煙化」「禁煙教材開発」「no smokingエリア化推進」の4つのプロジェクトが含まれています。

昨年度の職員定期健康診断および今年度の学生健康診断において、喫煙に関するアンケート調査を初めて行いました。その結果、職員の喫煙率は8.6%、学生の喫煙率は7.9%であり、全国平均よりはかなり低いことがわかりました。しかしながら、新入生2719名の喫煙率が0.6%（男子：0.7%、女子：0%）であるにもかかわらず、2年生では4.7%、3年生、4年生では6.6%、10.7%と学年を経て喫煙率が高くなり、さらには男子大学院生の喫煙率は約15%と、かなり高くなっていることが明らかになりました。大阪大学は、学生に対して十分な禁煙指導をする必要性を改めて認識するとともに、キャンパス禁煙プロジェクトの推進を迫られていると言えるでしょう。

保健センターでは、7月から学生／職員を対象として禁煙サポートプランを立ち上げました。多くの喫煙者は禁煙を希望していますが、ニコチン依存および心理的依存のために、なかなか禁煙に成功することができないことが知られています。平成15年度の国民健康栄養調査により、習慣喫煙者の約50%が平均4.6回禁煙を試みたことが明らかとなり、本年5月31日の世界禁煙デーに報道されました。効果的な禁煙方法とは、禁煙の動機づけを行い、その実行に踏み切らせ禁煙を維持するものですが、いくつかの方法と要因の組合せだけでなく、精神的サポートシステムの存在が成功をもたらすと考えられています。保健センターでは、医師とともに担当保健師を配置することにより、ニコチンパッチを利用したニコチン置換療法をメールを利用した密接な精神的サポートのもとで実施しています。これまでに何度も試みたけれど禁煙に至らなかった方のお問い合わせをお待ちしています。

（お問い合わせ先）

保健センター　06（6850）6038

e-mail : HOKENSENTA@ns.jim.osaka-u.ac.jp

たきはら・けいこ　プロフィール

1986年　大阪大学大学院博士課程修了

専門は循環器内科学、内科学一般。保健センターでは学生さんのよろず悩み事相談受付中。

大阪大学同窓会連合会発足

7月25日(月)、大阪大学は初めて天神祭船渡御に参加し、「阪大船」の船上で「大阪大学同窓会連合会」の発足を高らかに宣言しました。

暮れなずむ大川に大阪大学の旗をなびかせ、浪速の夏の風物詩の始まりとともにまさに同窓会連合会の船出となりました。

大阪大学では、部局毎の同窓会は組織されてきましたが、全学の同窓会は組織されていませんでした。以前創立70周年を迎えようとする直前に全学同窓会連合会を組織することが検討されましたが、その際には、残念ながら設立までの結論を得るには至りませんでした。そこでこのたび法人化を機として、昨年来総合計画室の下に、同窓会連合会（仮称）設立検討WGを設けて検討を進めて参りました。そして、このWGでの検討結果を踏まえ、7月19日には各部局の同窓会代表者に向け説明会を行い、翌20日の部局長会議を経て、25日開催の役員会において正式に設立が了承されました。

また、それを受けて、同日に大阪大学として初めて参加しました天神祭「船渡御」の船上において、乗船された各部局同窓会役員の方々をはじめ、学内外の本学関係者や報道関係者に対して同窓会連合会の発足について発表させていただきました。

設立検討WGで打ち出された最も重要な基本方針は、各部局における同窓会は堅持するとともに各部局同窓会の更なる充実に資するような連合会を組織するというものです。従って、連合会の正会員となる入会資格は、部局同窓会の会員であることを原則としています。（ただし、所属する部局同窓会がない教職員及びOBは、連合会だけの正会員になることはできます。）

連合会の事業としては、

①各部局同窓会の相互の交流、連携の推進
②新たな地域同窓会及び職域同窓会などの各種同窓会設立の支援
③阪大卒業生等と大阪大学との連携の推進

を掲げておりますが、大阪大学特に在校生に対する強力なサポート組織となってくれることを期待しております。

連合会を発足させましたが、その運営体制や活動等については、今後詰めていく必要があります。そのため、各部局同窓会より幹事を選出して頂き、幹事会を中心として早急に具体的な検討を開始する予定です。本学公式ホームページ上の連合会のWEB上には、それらの検討結果等を公開していくとともに、その他の各種情報も掲載し、また、各部局同窓会のホームページとリンクを張らせていただく予定としております。なお、連合会の主な役員は以下の通りです：

会　長　　熊　谷　信　昭
　　（社）大阪大学工業会会長、元大阪大学総長、
　　兵庫県立大学学長
副会長　　金　森　順次郎
　　理学部同窓会会長、元大阪大学総長、
　　（財）国際高等研究所所長
副会長　　松　本　圭　史
　　（社）医学振興銀杏会理事長、大阪大学名誉教授
顧　問　　宮　原　秀　夫
　　大阪大学総長
代表幹事　鈴　木　　直
　　大阪大学理事・副学長

（総務部企画推進課）

大阪大学同窓会連合会発足式
左から宮原秀夫総長、熊谷信昭会長、金森順次郎副会長

大阪大学同窓会連合会会則

第１章　総　則

（名　称）
第１条　本会は、大阪大学同窓会連合会と称する。

（目　的）
第２条　本会は、各部局の同窓会（以下「部局同窓会」という。）の発展に寄与するとともに、部局同窓会相互の交流、連携を推進することにより、大阪大学の卒業生等の交流、親睦を図り、併せて大阪大学との連絡を緊密にし、広く社会に貢献することを目的とする。

（事　業）
第３条　本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
(1)部局同窓会相互の交流、連携の推進
(2)新たな地域同窓会及び職域同窓会などの各種同窓会設立の支援
(3)卒業生等と大阪大学との連携の推進
(4)その他本会の目的に沿った事業活動

第２章　会　員

（正会員）
第４条　本会の正会員の入会資格は、次に掲げるとおりとする。
(1)部局同窓会の会員
(2)前号以外の大阪大学の教職員及び教職員であった者
(3)その他大阪大学の関係者で幹事会が認めた者

（賛助会員）
第５条　本会の事業に連携、協力できる団体及び個人は、賛助会員として本会に加入することができる。

第３章　役員等

（役　員）
第６条　本会に、次の役員を置く。
(1)会　　長　　１名
(2)副 会 長　　若干名
(3)代表幹事　　大阪大学理事から１名
(4)幹　　事　　部局同窓会から各１名
(5)会計監事　　若干名

（役員の選任）
第７条　会長及び副会長は、正会員の中から幹事会が推薦し、役員総会（以下「総会」という。）において選任する。
２　代表幹事及び会計監事は、総会において選任する。
３　幹事は、部局同窓会の推薦により、総会において選任する。

（役員の任務）
第８条　会長は、本会を代表して会務を総理する。
２　副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるときは、その職務を代行する。
３　代表幹事は、会務の執行を総括し、事務局を統括する。
４　幹事は、本会と部局同窓会との連絡調整を図るとともに、幹事会を構成し、会務の執行上重要な事項を審議する。
５　会計監事は、会計の執行状況の監査を行う。

（役員の任期）
第９条　役員の任期は、２年とし、再任を妨げない。ただし、役員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

（名誉会長）
第10条　本会に名誉会長を置くことができる。

（顧　問）
第11条　本会に顧問若干名を置くことができる。
２　顧問は、会務に関する重要事項について助言する。

（委　嘱）
第12条　副会長、代表幹事、幹事、会計監事は、総会の選任に基づき会長が委嘱する。
２　名誉会長及び顧問は、幹事会の推薦に基づき会長が委嘱する。

第４章　会　議

（会　議）
第13条　本会の会議は、総会、臨時総会及び幹事会とする。

（総会及び臨時総会）
第14条　総会は、第６条に掲げる役員をもって組織する。

2　総会は、次に掲げる事項を審議する。
(1)役員の選任に関する事項
(2)事業計画及び事業報告に関する事項
(3)予算及び決算に関する事項
(4)会則の改廃に関する事項
(5)その他会長が必要と認めた事項
3　総会は、毎年１回、臨時総会は、必要の都度、会長が招集し、その議長となる。
4　総会は、第１項に掲げる役員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。
5　総会の議事は、出席者の過半数をもって決定する。

(幹事会)
第15条　本会に、部局同窓会との連絡調整を図るため、幹事会を置く。
2　幹事会は、代表幹事及び幹事をもって組織する。
3　幹事会は、次に掲げる事項を審議する。
(1)正会員、賛助会員の入会及び退会
(2)総会に提案する議事及び会務の執行上重要な事項
(3)名誉会長及び顧問の推薦
4　幹事会は、代表幹事が招集し、その議長となる。
5　幹事会は、幹事の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。
6　幹事会の議事は、出席者の過半数をもって決定する。
7　幹事会は、必要と認めた者をオブザーバーとして出席させることができる。

第５章　会　計

(会　費)
第16条　正会員及び賛助会員は、それぞれ別に定められた会費を納入する。

(経　費)
第17条　本会の経費は、会費、寄附金その他の収入をもって充てる。
2　本会の会計年度は、毎年４月１日から翌年の３月31日までとする。

(監　査)
第18条　会長は、会計年度ごとに決算書を作成し、会計監事の監査を受けなければならない。

第６章　事務局

(事務局)
第19条　本会に、その事務を処理するため、事務局を置く。
2　事務局は、大阪大学内に置く。

第７章　会則の改正等

(会則の改正)
第20条　この会則は、総会において過半数の議決により改正することができる。

(雑　則)
第21条　この会則に定めるもののほか、本会の運営に関し必要な事項は、幹事会の承認を得て、別に定める。

附　則
1　この会則は、平成17年７月25日から施行する。
2　設立時の役員等は、第７条の規定にかかわらず別表のとおりとする。(別表略)

大阪大学同窓会一覧表

平成17年7月25日　現在

部局	同　窓　会　名
文	大阪大学文学部・文学研究科同窓会
人	大阪大学人間科学部同窓会
法	大阪大学法学部同窓会「青雲会」
経	大阪大学経済学部同窓会
理	大阪大学理学部同窓会 ・数学科同窓会 ・物理学科同窓会 ・化学・高分子同窓会「永契会」 ・生物学科同窓会
医	社団法人「医学振興銀杏会」 ・大阪大学医学部第一内科同窓会 ・大阪大学医学部第二内科同窓会 ・大阪大学医学系研究科第三内科（分子病態内科）同窓会 ・阪大第四内科同窓会 ・大阪大学医学部血液・腫瘍内科／微生物病研究所内科同窓会 ・大阪大学第一外科同窓会 ・大阪大学第二外科同窓会 ・大阪大学医学部整形外科学同窓会 ・大阪大学医学部脳神経外科同窓会 ・大阪大学医学部形成外科同門会 ・大阪大学医学部腫瘍外科（微生物病研究所外科）同窓会 ・大阪大学皮膚科学教室同窓会 ・大阪大学医学部麻酔科学教室同窓会 ・大阪大学医学部泌尿器科学教室同窓会 ・大阪大学医学部放射線医学教室同門会 ・精神医学教室同窓会「和風会」 ・大阪大学特殊救急部同窓会 ・法医学教室同門会 ・大阪大学医学部第一生理同窓会 ・大阪大学医学部第一生化学教室同窓会 ・大阪大学医学部薬理学教室同窓会（第一薬理、第二薬理合同） ・大阪大学臨床検査部・臨床検査診断学同窓会 ・大阪大学医学部耳鼻咽喉科学同窓会「参九会」 ・大阪大学医学部神経内科学同窓会「ともえ会」 大阪大学放射線技術科学学友会 大阪大学医学部保健学科検査技術科学専攻同窓会「はんえい会」 大阪大学看護同窓会 大阪大学助産師同窓会
歯	大阪大学歯学部同窓会 ・大阪大学歯学部旺栄会

歯	・大阪大学歯学部口腔病理学教室同窓会 ・大阪大学歯学部生化学教室同門会常安会 ・大阪大学歯学部口腔生理学教室同門会 ・大阪大学歯学部予防歯科学教室同門会 ・大阪大学歯学部口腔治療学教室同門会 ・大阪大学歯学部口腔外科学第一教室同窓会 ・大阪大学歯学部口腔外科学第二教室同窓会 ・大阪大学歯学部一補同門会 ・大阪大学歯学部歯科補綴学第二教室同窓会 ・大阪大学歯学部歯科放射線学教室同門会 ・大阪大学歯学部小児歯科学同門会 ・大阪大学歯学部歯科麻酔学教室同窓会 ・大阪大学歯学部顎治同門会 歯学部附属歯科技工士学校同窓会
薬	大阪大学薬友会
工	社団法人「大阪大学工業会」 ・大阪大学工学部醸造・醗酵・応用生物工学科同窓会 ・大阪大学工学部・大学院工学研究科化学系同窓会 ・大阪大学精密科学会 ・大阪大学応用物理学系同窓会 ・大阪大学工業会 機械部会 ・大阪冶金会 ・溶生会 ・大阪大学工学部電気系同窓会「澪電会」 ・三火会 ・環境会 ・庚子造船会 ・構築会
基	大阪大学基礎工学部同窓会 ・機械工学科同窓会 ・電気工学科同窓会 ・制御工学科同窓会 ・情報工学科同窓会 ・合成化学科同窓会 ・化学工学科同窓会 ・物性物理工学科同窓会 ・生物工学科同窓会
言	大阪大学大学院言語文化研究科同窓会
国	大阪大学大学院国際公共政策研究科同窓会「動心会」
微	大阪大学微生物病研究所同窓会
蛋	大阪大学蛋白質研究所同窓会
レ	大阪大学レーザーエネルギー学研究センター同窓会「泰山会」

※　複数の同窓会がある部局にあっては、太字の同窓会を各部局の連絡窓口同窓会とします。（部局同窓会（代表者）への通知文書等は、連絡窓口同窓会へお送りしております。）

基礎工学部同窓会「記念樹・記念碑披露式典・第一回Σ楷(かい)の木記念講演会」開催

基礎工学部同窓会・記念樹・記念碑披露式典が、5月26日(木)13時より、基礎工学部国際棟（シグマホール）前の待兼山池庭園にて開催されました。学問の木として知られる「楷の木」一対の披露と、基礎工学部の理念を記した石碑の除幕式が、基礎工学部草創期の教授である大竹伝雄名誉教授（化工）、伊藤順吉名誉教授（物性）、櫻井良文名誉教授（制御）と、西田正吾大学院基礎工学研究科長、山本嘉則東北大学大学院教授（合成一期生）、田中隼介株式会社クラレ常務取締役（化工一期生）、金田清臣基礎工学部同窓会長（大学院基礎工学研究科教授）の7名により行われました。

基礎工学部国際棟（シグマホール）ディスプレイ室に場所を移して開催された記念講演会では、金田同窓会長による開会の挨拶、西田研究科長からの祝辞の後、山本教授より、「合成方法論の開拓と生物活性物質の全合成」と題して、生物活性物質の全合成についてわかりやすく興味深いご講演を頂くと同時に、基礎工学部に在籍する学生・教員への熱いメッセージを頂きました。続いて、化学工学科一期生、田中氏からは「日本の化学企業の目指す方向」と題して、クラレの樹脂事業の世界展開を例に、グローバル化に必要な戦略をわかりやすくご講演頂き、講演会を閉会致しました。この講演会を基礎工学部同窓生、学内外の教職員・学生など約150名が聴講しましたが、山本教授、田中氏の情熱のこもった講演は聴衆を魅了し、会場を熱気で包みました。

待兼山会館レストランに場所を移して行われた懇親会では、産官学から50名余の同窓生にご参加頂き、大いに盛り上がりました。金田同窓会長より記念講演をして頂いたお二人の講師に記念盾が贈呈され、櫻井名誉教授の御発声による乾杯の後は、学年、学科を越えて基礎工同窓生同士、話の輪が広がりました。小林　猛前同窓会長、鈴木　直理事・副学長からの話も交え、まさに、基礎工らしい産学交流の場となり、久保井亮一大学院基礎工学研究科教授の挨拶をもって盛況のうちに閉会しました。

（大学院基礎工学研究科・基礎工学部）

楷の木、石碑の前で

薬学部・薬学研究科外国人留学生等歓迎パーティー開催

平成17年度薬学部・薬学研究科外国人留学生等歓迎パーティーが、6月9日(木)午後5時15分より薬学部2号館セミナー室において、約100名の参加を得て開催されました。

パーティーは山元　弘大学院薬学研究科長の開会挨拶、田中慶一大学院薬学研究科教授の発声による乾杯で始められ、外国人留学生、外国人研究員およびその家族に加えて、多くの教員、学生が加わり、留学生間の交歓に加え、留学生にとって日頃接する機会の少ない他分野の教員、学生と懇談する良い機会となりました。

外国人留学生・研究員の出身国は、中国、タイ、コンゴ、ルーマニア、インドネシア、フィリピン、バングラディッシュ、チリ、ブルガリア、エジプトと様々でしたが、自己紹介の際には多くの参加者が流暢な日本語で、学業・研究に対する抱負を語り、拍手喝采が送られました。また、参加者のご家族の中には元気に走り回る子供もいて、皆の笑顔を誘っていました。終始、楽しい雰囲気の中で懇親を深め、午後6時半、藤尾　慈大学院薬学研究科助教授による閉会挨拶の後に名残を惜しみつつ散会となりました。

（大学院薬学研究科・薬学部）

歯学部附属病院で中学生の「社会参加実習」受け入れ

歯学部附属病院では、去る6月13日(月)から4日間、大阪教育大学附属中学校3年生の男子3名を受け入れて社会参加実習をおこないました。

今回の社会参加実習は、『ふれあい看護体験』を中心に、病院の仕組みや職種、業務の内容を知ったうえで、患者の苦しみや家族の不安を少しでも理解し、助け合い、共存することの大切さ、弱者に対するいたわりの心を感じ取り、将来進むべき道を切り開いてもらうことを目的に受け入れをおこないました。内容は、歯科診療室の見学から始まり、技工体験、ブラッシングの方法、中央材料室での材料作成、薬剤部・検査部・手術室の見学、病棟での血圧測定や車椅子体験、シーツ交換、食事の配膳のほか、実際に経管流動食や病院食の試食も体験しました。中学生からは後日のアンケートで「看護師さんたちは、3交代をこなしながら昼夜働いているのはすごいと思った」や「医療関係の人間として絶対に忘れてはならない心得のようなものも数多く教わり、精神面においてもすばらしい経験であった」「人の役に立つ仕事につき、たくさんの人の役に立ちたいという気持ちがより一層強くなった」「患者さんのために一生懸命にとても神経を使って働いて、患者さんとのコミュニケーションをうまくとっている」という感想がありました。

(歯学部附属病院)

北大・工学研究科と情報交換会開催

工学研究科では、去る6月21日(火)に北海道大学大学院工学研究科と情報交換会を開催しました。この情報交換会は、教育、研究、管理運営などの取組状況について幅広く情報交換することにより、両研究科の教育、研究等の機能強化に繋げることを目的として開催されました。

今回は北海道大学から学部・研究科の改組理念、運営形態の改革例、工学教育の新しい取り組み、広報、情報管理や安全管理の取組状況などについての説明を受けた後、予定時間を大幅に超過しての活発な意見交換が行われました。

(大学院工学研究科・工学部)

人間科学研究科セクシュアル・ハラスメント防止等研修会実施

人間科学研究科では、セクシュアル・ハラスメント防止等に関する研修会を、同研究科ユメンヌホールにおいて6月23日(木)に実施しました。

この研修会は、セクシュアル・ハラスメントを防止し、望ましい教育研究環境を構築していくことを目的としたもので、教職員約60名が参加しました。

人間科学研究科セクシュアル・ハラスメント防止対策委員会委員長の三浦利章教授の進行により行われ、まず人間科学研究科長の小泉潤二教授からの挨拶があり、講師としてお招きした弁護士の中川克己先生から「大学におけるセクシュアル・ハラスメント防止について－セクシュアル・ハラスメントのない環境づくりに向けて－」と題する講演が約1時間30分にわたり行われました。

講演では、アメリカで70年代に既にあったセクシュアル・ハラスメント問題の歴史に始まり、現在までの判例などを引用しながら、セクシュアル・ハラスメントの問題性、職場・組織の損失・リスク、大学におけるセクシュアル・ハラスメントを考えるうえでのポイント、組織の責任、防止対策等について詳しく解説されました。

また、講演の中では、大阪大学（人権問題委員会）発行のリーフレット「STOP SEXUAL HARASSMENT」も用いて説明されました。

受講者は熱心にメモをとり、講演終了後には大学の教員が学生と接する場合の留意点等について種々の質疑応答が繰り広げられ、好評のうちに終了しました。

（大学院人間科学研究科・人間科学部）

AAU －APRU合同会議及び第9回APRU年次学長会議（於:シンガポール市）に宮原総長出席

日本の大学では本学及び東京大学等5大学が加盟しているAPRU（環太平洋大学協会）とAAU（The Association of American Universities）の合同会議及び第9回APRU年次学長会議が6月30日(木)及び7月1日(金)の日程でシンガポール大学で開催されました。

宮原秀夫総長は、本会議に出席し、環太平洋及び北米における大学における教育の国際化への新たな展開等をテーマとする合同会議及びAPRU年次総会の議事に参加しました。この中で、APRU年次総会では、2006年4月開催の地震防災関係の国際シンポジウム開催計画等を提案し、協力の了承を得ました。

今回の合同会議には、インドの大学協会（Association of Indian University）代表の参加も得た53大学からの学長の参加による大規模な会議となり、本学から出席した宮原総長を始め、鈴木　直理事・副学長及び辻　毅一郎総長補佐は、これらの各大学長等との会談・交流を通じて、本学の国際化への展開と実績をアピールするとともに、相互理解を深めることができました。

また、今回主催のシンガポール大学は、創立100周年に当たり本会議をその記念の一環として位置づけ、一連の行事日程の中で現職のS.R.ナザン大統領、リー・シェン・ロン首相及びリー・クアン・ユー首相特別顧問に特別の役割を演出するなど効果的な会議の企画の一面を印象づけました。

（研究推進・国際部国際交流課）

合同会議出席の各大学長（2列目中央：宮原総長）

コミュニケーションデザイン・センター発足記念式典挙行

コミュニケーションデザイン・センターでは、7月5日(火)に発足記念式典を挙行しました。

式典に先がけて行われた施設見学会では、会議室、工房等において活動状況のプレゼン、ポスターセッションやパネル展示を行いました。

引き続きホテル阪急エキスポパークで行われた記念式典では、学内の関係者約90名が出席し、宮原秀夫総長の挨拶の後、鈴木　直理事・副学長からセンターの設立経緯についての説明があり、中岡成文コミュニケーションデザイン・センター長からセンターの概要説明がありました。この式典は、センター教員の独自企画・演出により、映像を用いたスタッフ紹介や段差を設けた会場レイアウトなどに工夫を凝らしたものとなり好評を得ました。

式典に引き続き行われた平田オリザ客員教授による演劇ワークショップでは、出席者にも参加してもらい、コミュニケーションをテーマとしたワークショップを行いました。

レセプションは、鷲田清一理事・副学長の発声により乾杯が行われた後、祝宴に入り、終始和やかなうちに終了しました。

（コミュニケーションデザイン・センター）

式典風景

第6回（平成17年度）課外研究奨励費伝達式

第6回（平成17年度）課外研究奨励費の伝達式が、宮原秀夫総長、大和谷　厚学生生活委員会委員長等の出席のもと、7月6日(水)に事務局301会議室において行われました。

課外研究奨励費は、「学部学生の研究意識の向上」を目的とし、個人又はグループ単位の学生自身による研究テーマを募集し、独創的かつ意欲的であると認められたテーマに対して授与されるものです。

今回は、11件の研究テーマの応募があり、9件のテーマが採択されました。

伝達式では、初めに大和谷委員長から選考経過について説明があり、続いて宮原総長から受賞者に対しての賞状の授与と激励の言葉があり、その後、各受賞者から抱負等が述べられ、終始和やかな雰囲気のなか無事終了しました。

（学生部学務課）

在阪報道関係者と大阪大学との懇談会開催

7月14日(木)に在阪報道関係各社との懇談会が中之島センターで開催されました。これは本学の最新の教育・研究活動について情報発信するとともに、報道関係者との意見交換を目的として毎年開催されているものです。

午後4時から中之島センター9階の会議室のおいて開催された懇談会には、本学からは宮原秀夫総長、鈴木　直理事・副学長、馬越佑吉理事・副学長、馬場明道理事・副学長、仁科一彦理事・副学長、北見耕一理事・事務局長、橋本日出男理事、西尾章治郎総長補佐、高杉英一総長補佐、辻毅一郎総長補佐が、報道関係からは10機関から16名の出席がありました。宮原総長の挨拶の後、本学の管理運営に関する質疑応答を中心に意見交換が行われました。また、今回は初めての試みとして、教員による教育・研究トピックスのプレゼンテーションが6件行われました。

引き続き、交流サロンにおいて懇親会が催され、プレゼンテーションを行った教員と共に、本学の教育・研究トピックスとして配付された資料に関係する教員も多数参加し、報道関係者との情報交換が活発に行われました。

(総務部評価・広報課)

人権問題に関する講演会開催

人権問題に関する講演会が7月15日(金)に人間科学研究科ユメンヌホールにおいて開催されました。この講演会は毎年7月及び12月に本学の人権問題啓発行事の一環として開催されているもので、今回は労働ジャーナリストの金子雅臣氏を講師に招き、「セクハラ、パワハラ最新事情－なぜ起きる、どう対処する」と題してご講演いただきました。

講演会では、パワーハラスメントの具体的事例やセクシュアル・ハラスメントについての最新事情などをお話しいただき、当日参加した約80名の教職員・学生は最後まで大変熱心に聴講しました。講演終了後には活発な質疑応答が行われるなど大変有意義な講演会となりました。

(総務部総務課)

大阪大学安全対策講演会を開催

7月の全国安全週間にあわせて、教職員の安全意識を高め、労働災害等の事故防止を目的に、7月15日(金)15時から、大学教育実践センター・イ号館講堂において、大阪大学安全対策講演会が開催されました。

講師には、本学名誉教授で交通科学研究所所長の長山泰久先生と米村勝義大阪府豊中警察署生活安全課長をお迎えしました。

長山講師からは「交通事故の防止」、米村講師からは「日常生活における防犯」について、それぞれ具体的な事例を取り上げながら、示唆に富んだ大変有意義なご講演をいただきました。

当日は、教職員、学生あわせて125人の参加がありました。

(安全衛生管理部)

米村勝義豊中警察署生活安全課長

第25回大阪大学共済組合ボウリング大会を実施

平成17年度共済組合福祉事業の一環として、ボウリング大会が去る7月20日(水)～22日(金)の3日間にわたって新大阪のイーグルボウルにおいて行われました。

本年度の参加人数は518名で、1人2ゲームの合計得点を競う個人戦により熱戦が繰り広げられました。

なお、入賞者は右のとおりです。

(財務部資金管理課)

◇男子の部(参加人数315名)

優　勝(403点)	保健センター	田中　隆
準優勝(371点)	産業科学研究所	大西政義
第3位(357点)	総務部総務課	神原専治

◇女子の部(参加人数203名)

優　勝(305点)	医学部附属病院	米井民子
準優勝(296点)	医学部附属病院	名加英子
第3位(276点)	医学部附属病院	本地川美枝子

始球式を行う宮原総長(右)と北見理事(左)

博士学位記授与式挙行

7月27日(水)午前11時30分から医学部銀杏会館において、博士学位記授与式が挙行されました。

今回の授与式は、3月30日から7月25日までの間に学位の授与が決定された84名（課程博士40名、論文博士44名）に対するもので、宮原秀夫総長から出席者各人に学位記が授与されました。

（総務部総務課）

平成１７年度「就職担当教員・学生生活委員会懇談会」開催

平成17年度「就職担当教員・学生生活委員会懇談会」が、7月27日(水)午後1時30分よりコンベンションセンター（1階研修室）で開催された。

学生にとっての最大の関心事は、卒業（修了）後の就職であり、法人化後は、大学の評価もその就職状況が大きな要素となっている。

この懇談会は、組織的な就職支援の強化の一環として、各部局の就職担当教員及び学生生活委員会委員を対象に就職指導に対する意識の高揚を図ることを目的に企業就職媒体社等の講師による企画開催されたものであり、今回は昨年に続き第2回目で全学部から25名の教員の参加があった。

当日は、大和谷　厚学生生活委員会委員長による挨拶及び佐野邦雄キャリア支援室長からの資料による就職状況などの説明に始まり、原田知秀株式会社リクルートブック編集長（兼就職ジャーナル副編集長）による講演「2005年採用・就職最前線」の後、川村好秀本学就職相談員による報告「本学の就職相談の実態報告について」が行われた。

講演等の終了後は、「本学の就職支援」などについて、活発な意見交換・情報交換の場となり、懇談会は盛況のうちに終了した。

（学生部キャリア支援室）

懇談会の様子

名誉教授招待懇談会開催

本年度の名誉教授招待懇談会が6月24日(金)午後3時30分からイ号館イ講堂において、93名の名誉教授の出席のもとに開催されました。

宮原秀夫総長の開会挨拶に始まり、昨年秋の例会以降に亡くなられた名誉教授の先生方への黙祷、当日出席いただいた新名誉教授の先生方の紹介に続き、今年度学士院賞受章者及び春の叙勲受章者の紹介がなされ、受章者を代表して北村幸彦名誉教授からご挨拶をいただきました。

その後、宮原総長から「大阪大学の近況」として、法人化後の業務運営や大阪外国語大学との統合に関する進捗状況、新たに設置された法務室やコミュニケーションデザイン・センター等について説明・報告がなされました。

その後、イ号館1階の総合学術博物館や国立大学では初めてとなるPFI方式にて今春建設されたばかりの学生交流棟の各施設を見学いただきました。

懇親会では冒頭に部局長等の紹介が行われ、金森順次郎元総長の乾杯の発声のもと、お互いの近況など旧交を温めながらの歓談が和やかな雰囲気のうちに続けられ、午後6時に盛会のうちに終了しました。

なお、宮原総長からの本学の近況報告は次のとおりです。

それでは本学の近況報告をさせていただきます。

まず、昨年度を総括いたしますと、総長を中心とした管理運営体制を整備し、大学と部局の責任と権限の所在を明確にしていく中で、これまで実施してきた教育研究、管理運営の施策を見直し、新しい枠組みの中での積極的、戦略的な施策を導入・実施することにより、中期目標期間の初年度の計画を十分達成することができたのでないかと思います。

17年度以降についても、法人化の枠組みをより堅固なものにする中で、教職員の更なる意識改革をはかり、教育研究における着実な成果を挙げることを目指していきます。また業務の改善について、昨年度幾つかの大きな見直しを実施しましたが、今後も重要な課題として継続していく必要があると思います。

それでは、幾つかの項目にわけて説明いたします。業務運営に関しましては、「学び甲斐のある、研究し甲斐のある、働き甲斐のある大阪大学」に向けて、いろいろ改善していこうということです。

法人化後はこれまでにもご紹介してきましたが、総合計画、教育・情報、研究推進、評価・広報、財務・会計、人事労務を所掌する6つの「室」と国際交流推進本部を設置しています。これら各室と推進本部に担当理事を置き、その責任と権限の所在を明確にし、また各部局においては副部局長制を導入し、執行部の管理運営の強化ならびに即応体制がとられるシステムをこれまでに一応整備してきたところですが、それが今年度からは、うまく機能しているかどうかを検証していく段階に入ってきております。

まず、事務改革については、部局事務の改編により合理化・効率化を進め、また事務改革検討会議を設置し、職員の勤務時間管理の在り方、超過勤務の対応などについて検討しているところです。

一方、学際融合的な教育プログラム、研究プロジェクトを支援する体制の整備ということで、学内でいろいろなプロジェクトがスタートしておりますが、個々に発生する事務案件をそれぞれで行っていては効率が悪いので、例えば、学際融合教育研究プラットフォームというような新たな組織を設置することにより、大学の中での教育プログラムや研究プロジェクトがスムーズに立ち上がるように検討を進めています。

次に、新しい教員組織の在り方に関する検討を開始しています。これは中央教育審議会で検討されている段階ですが、これまでの教授・助教授・助手とい教員の職名を教授・准教授・助教・助手という職名に変わるということで、それにあわせて人事の問題、給与の問題等について検討が必要になります。

また、施設マネジメントの一層の推進ということですが、これまで大学の建物を建てていく時には、どちらかと言えば単発的な計画が行われ、あまり統一性のない建物があちらこちらに建ってしまったということがありますが、これからは大学全体のキャンパスプランニングをする委員会を作って計画的に進めていきます。建物を概算要求していく上で、しっかりプランニングしたものを出していかないと、予算がつかないということになっています。

それから安全衛生管理体制ですが、専任の教員（助教授・助手）ならびに定期巡視担当職員、事務職員からなる「安全衛生管理部」を設置し、全学の安全衛生管理を一元的に管理するようにしました。また情報管理体制としまして、本学が有する情報資産を不正アクセス等から保護するためセキュリティに優れた情報環境を整備するとともに、情報セキュリティに関する啓発活動を積極的に進める計画です。

またリスクマネジメントの対応としては、総合計画室での検討を踏まえまして、今年度から顧問弁護士、連携弁護士、高等司法研究科および法学研究科の教員からなる「法務室」を設置し、大学の法的諸問題（訴訟・損害賠償請求）に対応していく体制を整えました。

それから、大阪外国語大学との統合でございますが、連

絡協議会を立ち上げており、これまでに20回近く会合を持ち、一応、今の段階で二つの大学が統合したときに、どういう研究科を置き、どういう学部構成にするかというところまで、ある程度コンセンサスを得られました。今後、連絡協議会の下にワーキングを作りまして、双方からもう少し具体的な検討をしていくことになっています。例えば、財務や人事の問題であるとか、細部に入っていきますと結構ややこしい問題が出てくるわけです。一例を申し上げますと、両大学で定年が大阪大学は63歳ですが大阪外大は65歳というように異なります。

その他様々な問題について検討していかなければならないと思いますが、私は、ここまで来たら相当困難なことがない限り、その実現に向けて進んでいきたいと思っています。やはり統合するためには、我々が血を流さずに、何も打ち出さずに統合を行うことは非常に難しいと思います。

短期的に見ればデメリットがあるかも知れませんが、長期的なレンジで統合を考えていきたいと思っています。

それから全学的な同窓会組織の充実ですが、既にほとんどの部局の同窓会が存在しますが、それらを全部解体して統合するというわけではありません。それぞれある同窓会の上にアンブレラとして同窓会連合というものを作っていこうと考えています。そうすることによって、大学から発信した情報が各同窓会にスムーズに流れる、あるいはまた同窓会会員からの情報が大学にスムーズに上がって来るというルートを作りたいと思っています。

そして天神祭りの7月25日に大阪大学として初めて船渡御に船を出しますが、その際に連合会の発足式を行いたいと思っています。数日前の新聞にも、「卒業生よ阪大をもっと愛して」と、天神祭りの船渡御のときに同窓会連合会の発足式を行うということが掲載されております。

次は財務の話に移らせていただきますが、法人化になり、ようやく1年が経過したわけですが、やっと16年度の決算が出まして、どうにか赤字にならずに、剰余金を残す形で決算できたということをご報告したいと思います。これも企業会計が導入され、なかなか皆慣れてないところを非常に綿密な検討と多大な努力をしていただいた事務の方々のおかげであると思っています。

そういうことで、一応健全財政で赤字を出さずに決算できたということで、今度はそれをどのように有効に使っていくかということですが、病院の剰余金は優先的に病院の設備の更新に充てるということです。通常、一般の方々から見ますと、大学病院というのは最先端の医療機器が整い、最先端の治療を受けられる所ですし、社会貢献という観点から考えたときに大学の中で一番市民の方と接している所が、病院ではないかと思います。

ちょうど本学の病院は移転してから10年になりまして、その時に更新した機器が、ほとんど再度更新の時期に来ているわけです。企業では、減価償却という概念がありましたから、そういったときに新しいものを買うという概念がありましたが、国立大学の場合は減価償却という概念が全くありませんでしたので買ってそのまま、今度買い換えるという時のお金というのは全く無いわけです。ですからこの法人化になり、減価償却という概念が導入され、そういうところに優先的にそのお金を分配していこうということです。

それから総長裁量経費ですが、通常でいきますと運営費交付金が1%ずつ効率化によって減っていくわけですから、総長裁量経費も減るわけですが、いろいろな経営努力、経営方針により増額をしていただきました。昨年度より1億5千万円の増額の8億6千万円で今年度はいきたいと思っています。

重点・間接経費の利用状況については、途中で使途の報告を受け、健全に使われているかどうかのチェックが不可欠であると思います。

次に、任経理金を中心とした積極的な資金運用についてであります。委任経理金を、今までは単に銀行預金として眠らせていました。そこで、資産運用を図るということで、その委任経理金のうちの半分を、国債の購入に充て、約2千万円ほどの増収を得ました。やはり法人化し、一法人として大学を経営するということを問われているわけで、財務会計というのは非常に重要な要素です。

次に人事労務ですが、高年齢者雇用安定法の改正に基づき定年後の再雇用制度を検討しており、平成18年4月施行に合わせて本学においても導入に向けて人事労務室で検討するようにお願いしております。

それから新しい職員の採用方式の検討ですが、特別な知識を持った者の採用、例えばコンピューター技術が優れている、あるいは会計に非常に優れているなどそういう特殊な事務職員を優先的に雇用する方法を検討しております。障害者の雇用については、常に何%の障害者の人を雇用しているかというのを常時チェックされていますので、出来るだけそれを満たすような方向で持っていきたいと考えています。

それから任期付常勤の看護師の新たな人事制度の確立ということで、今までの時間給等による雇用ではなく、優秀な看護師を雇うということが病院にとっても非常に重要な使命になってきていますので、新たに任期付きで常勤の月給制の看護師を雇用できる仕組みをつくりました。

病院は、文部科学省からは毎年2%の増収を要求されており、2%と言いますと大体4億円ぐらいで、その4億円の収入が実際に上げられなかったらどうなるかといいますと、収入が上がったという前提のもとで、4億円の運営費交付金が削られるという仕組みになっているわけです。このため、同じ額の運営費交付金を得ようと思いましたら、どうしても病院の収入を上げていく必要があります。こういうことで、大学附属病院を抱えている大学は、非常に大変な経営を迫られているということになります。

医学部ご出身の先生方はご存知だと思いますが、この近くに900床くらいの病院ができるとすれば、当然、競争ということになりますので、大阪大学病院に行った時にいい看護師がいて、いいサービスを受けられるということを実現していかなければならないということです。

それから、個人の評価に基づくインセンティブの付与ということですが、大学にはいろいろ突発的な仕事がありまして、今までのように委員会の委員に就任をお願いしますというだけでは、すまなくなってきています。

例えば人権問題委員になった先生方は、ある時は、それを解決するために、ものすごい時間を割かないといけないことが起こってくるわけです。そういうことに関して、本部で持っているファンドを、その業績手当としてボーナスに加算していくという方向を検討し、今年から実施しているところでございます。

次は評価・広報ということですが、評価というのは法人化になり、毎年、国立大学法人評価委員会から大学はちゃんと中期計画に沿ったことをしていましたかという評価を受けるわけです。また業務実績報告書というのを提出して、達成状況評価というのが行われます。

今後この評価というのは非常に大きな問題でして、評価する側、される側も手探り状態で進んでいますが、我々としては6年間の中期目標・中期計画が終わる時点で、きちっと評価されて、それが次の中期目標期間中の運営費交付金に反映してくるのだと聞いています。

次は広報ということで、これも大事であり、地域連携、産学連携推進のために広報活動を積極的に行うということから、広報機能の拡大ということでホームページをリニューアルいたしました。やはり社会の人は我々が思っている以上に大学のホームページを見て情報を得ているということです。

それから、ホームページに名誉教授の先生方の活動状況を掲載するページがありますので、よろしくご協力お願いいたします。

次は教育ということですが、法人化し大阪大学としてどういう教育目標のもとに学生を教育していくのかということで、教養・デザイン力・国際性という、この三つのキーワードを打ち出しております。これらに基づいた多様な教育プログラムを実施していくために、昨年度から法人化と同時に、大学教育実践センターを設置いたしました。

これは全学の共通教育科目の抜本的な見直しと言うことでして、今この時代に本当に必要な教育内容はどういうものかということを考えております。

そこには、共通教育実践部それから教育実践研究部の二つの部門からなっており、専任の教員を何人か配置した、バーチャルでなくて実際のセンターとして機能しております。ここでは大学の共通教育の全てを管理し、円滑な教育が行われるようにしています。

それから次は今年の4月からスタートしたコミュニケーションデザイン・センターです。今まで医者や看護師が患者と上手にコミュニケーションがとれない、あるいは研究者、専門家が一般の方と十分コミュニケーションがとれないといったコミュニケーション不全がもとで、様々な問題が発生しているというところに焦点を置いているわけです。

来年度から第3次科学技術基本計画というのがスタートするわけですが、その中では重点4分野、「ナノ」「情報」「バイオ」「環境」ということは変わりないようですが、特に科学技術と社会というキーワードが出てきておりまして、科学技術が社会にどう関わっていくのかということが、その第3次科学技術基本計画の中に盛り込まれていこうとしております。我々としてはそれを先取りいたしまして、この4月から、このコミュニケーションデザイン・センターを立ち上げたわけです。初年度に文部科学省に概算要求しましたが、いきなり認めていただきまして、年間1億なにがしかのお金をいただきまして、一応5年間継続するということになっております。

これをひらたく言いますと、大学教育実践センターが学部学生の共通教育を担当するところ、コミュニケーションデザイン・センターといいますのは大学院学生を対象に、大学院学生にとっての共通教育といいますか、教養科目を担当するというようにお考えいただいたらいいかと思います。

それから新しく主専攻・副専攻それからジョイントディグリーのようなものを取れるように、学生の多様なニーズに応えていこうという試みです。

つづいて研究でございます。先程教育におきましては「教養」・「デザイン力」・「国際性」というのをキーワードにいたしましたが、研究の面では自由な発想に基づく研究をベースに「インターフェイス」、「ネットワーク」というのを二つのキーワードにして研究を実践しているところです。

21世紀COEプログラムは、現在15拠点が走っております。初年度開始の7件は中間評価を受けましたが、どれも良い評価をいただいております。文部科学省の概算要求の区分に特別教育研究経費というのがありますが、これは競争的な経費となっており、これがどれだけ取れるかによって運営費交付金の増減に非常に効いてきます。今までのように単独の大学だけでやるということではなかなか通りにくくて、他の大学と連携していくということを文部科学省としては応援しているところのようですので、我々も東京大学や京都大学というようなところと連携しながらこういうプロジェクトを進めているところでございます。それから先端融合研究分野への対応ということで、その競争的資金、外部資金をとっていかなくてはならないのですが、そのためには今までのように各部局で単発的にプロポーザルを出しているのでは、大学としての戦略がありませんので法人化後は研究推進室というところを設けまして、そこで

研究のグランドデザインというもの、大阪大学はこういうふうに研究を進めていきましょうということを企画立案しています。こう言いますと、何か研究推進室がトップダウン的に大阪大学の研究をコントロールするというようなイメージに取られがちですが、そうではなく、ボトムアップ的に、いろんな情報を収集しまして、そしてその中で研究推進室がそれらの情報に基づいて大きな方向性を打ち出していくということでございます。産学連携ということも、いろんなことを言われておりますが、さらにこれを推進していくということにしております。

それからもうひとつ、我々に教育研究と共に強く求められておりますのは「国際交流」「社会貢献」ということです。「国際交流」に関しましては、国際戦略本部強化事業による国際企画室の立ち上げがあります。これは国際戦略本部強化事業という文部科学省の事業がありまして、そこに先程、言いましたようにプロポーザルベースで取りに行くわけです。我々申請いたしまして、認めていただき、国際企画室というものを立ち上げることが出来ました。そこで、国際交流に関する企画、立案能力を高めていきたいと思っております。特に、留学生の問題、ご存知のように10万人計画といって、やっと10万人に達したわけですけれども、ふたを開けてみたら留学生の質が問題であるということを文部科学省が言い出したようです。我々大阪大学では、今、学部・大学院を合わせて2万人の学生がいるわけですけれども、そのうちの約1千名、5%が留学生でございます。

文部科学省から、もっともっと比率を上げろということを言ってくるわけですけれども、まあ10%が目標ということなんですが、本当にそういうことをそのまま鵜呑みにして、大阪大学としての戦略を立てていいのかどうかという問題があります。ご存知のように日本全体で10万人の留学生受入れを達成していますけれども、国費で来ている留学生は9千何人で1万人に達していないんです。残りは全部私費留学生です。そして現在、いろんな社会問題を起こしている留学生の大半は私費留学生であると聞いております。

当然、何も考えないで、その10万人の政策を進めればそういうことになると、私は前から警告していたところです。ところが文部科学省は今頃になって、質が問題です、大学はもう少し厳しい出題の試験をして下さい、だけど数はと、こういう矛盾したことを言ってくるわけで、我々としてもきちっとした留学生施策を打ち出していかなくてはと思っております。

それから海外拠点ですけれども、これも国際交流を進めていく上で、我々取り組んでいるところです。まず、サンフランシスコに事務所を設けたということは以前に報告させていただきましたが、常勤の教員と事務職員が1名ずつ常駐しております。そこでは、我々の活動をそこを拠点に発信していくと同時に情報も収集しています。それからもう一つ具体的なこととしましては、今年度から、サンフランシスコのこの事務所に、向こうの著名人の方に来ていただきまして、そこからいわゆるネットワークを通して、先程言いました大学教育実践センターで行われる共通教育の講義をしていただくことにしました。まず第1回目はサンフランシスコの日本領事に出演していただきまして、大阪大学の学生に向けて講義をしていただきました。その後は、例えばベンチャーを作って成功した方とか向こうでいろんなを活躍されている日本人の方がたくさんおられるわけで、そういう人たちの体験談をお話ししてもらっています。日本に来ていただかなくても、そのサンフランシスコの事務所を通じて、遠隔で講義していただくということです。

この講義は、結構人気があり毎回200名近くが出席し超満員ですので、成功だったと思っております。

それからバンコクにおきましても、すでにオフィスを設けておりまして、既に1名の先生に行っていただいて特に生命科学の研究を展開しております。オランダのグローニンゲンにおきましても大阪大学の事務所を開所いたしまして、それと合わせて記念シンポジウムをこの秋に行う予定でございます。

それからもう一点、サンフランシスコ事務所におきましては来年度に環太平洋大学連合(APRU:Association of Pacific Rim Universities)と連携して、サンフランシスコの事務所がメインになってシンポジウムを開くことにしています。テーマは、今のところ災害といいますか、大地震が起こったときにどうするのかというような問題をテーマにシンポジウムを開く計画をしております。

また、国際交流に関する外部意見の積極的な取り込みということで、いわゆる大学外部の著名な方にアドバイザリーボードに入っていただきまして、外部の意見を聴取して国際交流問題を検討していくということを進めております。

最後に社会貢献ですが、中之島センターについては、お陰様で10階の佐治敬三メモリアルホールは、非常に稼働率が高うございまして、いろいろな同窓会や学会のパーティーなど開いていただいております。ただ、運営について1年間メンテナンスしていくために相当の経費がかかるんですけれども、それをこれからどういう枠組みの中で、見つけていくかということを考えております。

先程申し上げたことの繰り返しになりますが、附属病院というものは大学の財政に極めて大きな影響を及ぼすことになります。国から2%の増収というものをデューティーとして与えられておりますので、それを何とか実現していかなくてはならないからです。従いまして医学部附属病院の経営は、大学の経営の中で最も重要な要素として考えていく必要があるということでございます。

あちこち雑ぱくな話になってしまいましたが、私としましては、今、申し上げたたくさんの項目を、これからこの17年度にどこまで実現していけるか頑張っていきたいと思いますので、引き続き先生方のご協力をお願いしたいと思います。

(総務部総務課)

表彰等

小西　毅助教授「応用物理学会光学論文賞」受賞

大学院工学研究科　小西　毅助教授が、応用物理学会光学論文賞を受賞しました。

この賞は、応用物理学会の賞の中でも46年の特に長い歴史を持ち、光学の分野における優秀論文の著者に対し授与される賞です。

今回受賞の対象となった研究は、光の時間と波長と空間に重畳された情報間の変換・処理を可能とする超高速時空間光情報処理に関する研究で、小西助教授は超短光パルスの持つ時空間性を活かすことにより、空間展開した波長と時間軸での並列処理を用いた時間可変かつ超高速なスペクトル変調の手法を提案・実証しました。特に、次世代光通信をはじめ超短光パルスを扱う多くの分野での応用が可能である点が高く評価されました。

授賞式は、3月30日(水)に、第52回応用物理学関係連合講演会会場（埼玉大学）で行われました。

光学論文賞状

小西　毅殿

社団法人 応用物理学会
会長 榊　裕之

今中信人教授「市村学術賞（功績賞）」受賞

大学院工学研究科　今中信人教授が、第37回市村学術賞（功績賞）を受賞しました。本賞は、日本の大学並びに公的研究機関で行われた研究のうち、学術分野の進展に貢献し、実用化の可能性のある研究に功績のあった技術研究者に贈られる賞です。受賞された研究は『新規多価イオン伝導性固体の創成と環境汚染ガスセンサへの実用化』で、独創的な研究で学術的な価値が高く、かつ、その研究成果の実用化で産業の進展に大きく貢献が期待できることが評価されました。

授与式は財団法人 新技術開発財団総裁 寛仁親王殿下の御台臨を仰ぎ、4月28日(木)、ホテルオークラにおいて行われました。

奥山雅則教授　半導体理工学研究センターより感謝状贈呈

大学院基礎工学研究科 奥山雅則教授は、㈱半導体理工学研究センターとの共同研究「不揮発性メモリ・ロジック ULSI 用強誘電体薄膜の水熱合成による 400℃以下低温成膜プロセス技術の開発」（2003 年 4 月～ 2005 年 3 月）を通じて、産業界のニーズの把握と先端的研究を推進し、更に若手研究者の育成に尽力しました。

その結果、日本半導体産業界の期待に応え、産学共同研究の実を高めるために多大な貢献をしたとして、5 月 31 日(火)、半導体理工学研究センターにて研究報告会の後、感謝状が贈呈されました。

上松太郎君、追風寛歳君に「第 2 回マイクロン奨学金」授与

昨年度から創設された米国マイクロンテクノロジー財団からの奨学寄附金に基づく第 2 回マイクロン奨学金授与式が、6 月 2 日(木)に大学院基礎工学研究科に於いて、6 月 8 日(水)に大学院工学研究科に於いてそれぞれ開催されました。

この奨学金は、マイクロエレクトロニクス分野（物理工学、電気工学、化学・生物工学、機械工学、システム工学、コンピューター工学、情報工学など）を専攻する大学院博士前期課程に入学した学生で、優秀な学部学業成績をおさめ、優れたリーダーシップを発揮できる人物を対象に 2 年間奨学金が授与されます。

両研究科の選考委員会において、奨学生が選考され、授与式当日にはマイクロン・ジャパン社の関係者、両研究科の研究科長、選考委員会委員等の関係教員、奨学生、学部生が出席のもと、奨学金授与式が執り行われました。

両研究科の栄えある第 2 回奨学金受賞者は、下記の 2 名で、両研究科長から奨学金証書を、マイクロン・ジャパン社から楯が授与されました。両君の栄誉を称え、今後の活躍を期待いたします。

第 2 回マイクロン奨学生

- 大学院工学研究科　応用化学専攻　博士前期課程　1 年次　上松　太郎
- 大学院基礎工学研究科　システム創成専攻　博士前期課程　1 年次　追風　寛歳

工学研究科第 2 回マイクロン奨学生（上松太郎君）を囲んで、マイクロン財団関係者と工学研究科関係者

基礎工学研究科第 2 回マイクロン奨学生（追風寛歳君）に西田基礎工学研究科長から証書が授与

表彰等

鳴海邦匡招聘研究員・特任研究員　「歴史地理学会学会賞」受賞

大学院文学研究科人文地理学教室の招聘研究員・特任研究員である鳴海邦匡さん（当教室・前助手）が歴史地理学会学会賞（第3回）を受賞し、7月1日(金)～4日(月)に奈良大学で開催された歴史地理学会大会において表彰されました。受賞の対象となったのは、『歴史地理学』44巻3号（2002）に掲載された論文「近世山論絵図の定義と分類試論―北摂山地南麓地域を事例として―」です。

吉田敏臣名誉教授　タイ王国マヒドン大学から名誉博士号を授与

吉田敏臣名誉教授（元生物工学国際交流センター長）にタイ王国マヒドン（Mahidol）大学から名誉理学博士号が授与されました。

吉田名誉教授は、1968年に大阪大学大学院工学研究科（発酵工学専攻）博士課程を修了後、大阪大学工学部発酵工学科助手、助教授などを経て、1988年に生物工学国際交流センター教授に就任されました。（バイオプロセス工学の第一人者として、微生物や動植物細胞の培養プロセス開発研究に従事しました。この間、国際学術雑誌に180を超える論文を発表し、29冊の著書を著しました。）

30年間の大阪大学在任期間中、300人を超える学生、院生を指導してきましたが、中には、（東南アジアを始めとする）外国人留学生が数多く含まれています。彼等は、帰国後、大学教授や研究所長として、それぞれの国において指導的な役割を担っています。また、生物工学国際交流センター長として、（タイ王国のバイオテクノロジー発展のため、）マヒドン大学理学部内に大阪大学とマヒドン大学の協同研究施設の設置に尽力しました。さらに、定年退官後は、日本学術振興会バンコク事務所長に就任し、今も、タイ王国におけるバイオテクノロジーの教育・研究の充実・発展に努めています。

以上の顕著な功績がマヒドン大学評議委員会において高く評価され、名誉博士号が授与されました。非常に権威のある称号で、過去10年間の本学関係者への授与は、1998年度の大嶋泰治名誉教授、2003年度の岸本忠三前総長、2004年度の吉田教授の3名であります。授与式は、7月8日(金)に、Sirindhorn王女のご臨席のもと、（アンポーン公園内の新ホールにおいて）厳粛に執り行われ、Pornchai学長による功績紹介の後、王女から直々に学位記が手渡されました。また、11日にはAmaret理学部長主催の祝賀会が（Siam City Hotelで）催され、（理学部教員のみならず多くの関係者が出席して、）吉田名誉教授の功績を称え、名誉博士号の授与を祝いました。

Sirindhorn王女から吉田名教授への学位記授与

授与式の後、令夫人と記念撮影

山元　弘教授、藤田一郎教授、堀江恭二助教授「武田科学振興財団2005年度研究奨励金」受賞

薬学研究科・山元弘教授（研究科長）、生命機能研究科・藤田一郎教授、医学系研究科・堀江恭二助教授が、「武田科学振興財団2005年度研究奨励金」を受賞しました。

この研究助成は、ライフサイエンスに関する科学技術の進歩、発展に大きく貢献する研究に対し、200万円の研究奨励金が助成されるもので、本年で第39回目にあたります。

受賞課題は、以下のとおりです。

○山元　　弘　教　授　「Prostate Cancer Antigen-1（PCA-1）を分子標的とする前立腺癌治療戦略」
○藤田　一郎　教　授　「両目立体視の脳内メカニズム解明と新たな奥行き知覚検査システムの開発」
○堀江　恭二　助教授　「両アレル変異導入法を用いたES細胞分化経路の網羅的解析」

贈呈式は7月11日(月)、午後1時から総長室において、行われました。

和やかな雰囲気のもと、宮原秀夫総長、内林政夫武田科学振興財団理事長及び遠山正彌医学系研究科長、平野俊夫生命機能研究科長の挨拶で始まり、宮原総長から「貴財団の気持ちを受け止め、研究に邁進していきたい。」との挨拶がありました。

挨拶に続いて宮原総長、遠山、平野両研究科長の立ち会いのなか、内林理事長から3名の受賞者に贈呈が行われ、各受賞者からは、各々研究内容の紹介と謝辞が述べられました。

（研究推進・国際部研究推進課）

贈呈式後、記念写真におさまる前列左から堀江助教授（受賞者）、内林理事長（武田）、宮原総長、山元教授（受賞者）、田村助教授（受賞者・代理）、後列左から櫻田大阪支店長（武田）、横山評議員（武田）、水元常任理事（武田）、平野生命機能研究科長、遠山医学系研究科長

金属酵素と水素結合

大学院理学研究科教授　上　山　憲　一

金属酵素の特有の構造と反応性は配位子であるペプチド鎖や有機補欠分子族に因るところが大きく、金属中心の安定化、活性化を円滑に繰り返して触媒作用を働かす。特に、配位原子への水素結合が機能制御に重要な役割を果たしていることが明らかとなった。

ルブレドキシンなどの電子伝達蛋白質は配位子部位のアミノ酸配列が進化の過程で保存されている。また、金属酵素の活性部位は疎水的な環境にあるため、低極性溶媒で環境を再現し、保存されたアミノ酸配列を有するペプチド錯体を合成するという全く新しい研究手法を確立した。低極性溶媒中ではペプチド主鎖のアミド基は配位硫黄原子と分子内 NH…S 水素結合を形成し、ヘアピンターンとして固定化されていることを明らかとした。これに伴い、酸化還元電位は正側にシフトし、従来のモデル錯体では実現不可能だった酵素の酸化還元電位の再現に成功した。

モリブデン・タングステン酵素ではジチオレンモデル錯体の合成を世界に先駆けて合成し、硫黄配位子のトランス影響による M=O 結合の安定化と活性化を示し、配位原子への NH…S 水素結合の形成と切断が M-S の dπ-pπ相互作用を通して金属イオンの反応性を制御していることを示した。

酸化酵素であるシトクローム P450 などの活性部位はヘム鉄のチオラート錯体であるが、当時、結晶構造解析を行った研究者でも言及していなかった NH…S 水素結合の存在を提唱し、酸化還元電位のシフトを示すとともに、酸化型が空気や熱に対して安定になることも見出した。

また、チオラート錯体を系統的に研究することで NH…S 水素結合が M-S 結合を短く、強くすること、一方、ヘム鉄では配位子から金属への電子供与を減少させ結合距離を長くすることを見出した。何れの場合もチオラートの塩基性を低下させ、加水分解に対して錯体が安定になることを明らかにした。

配位原子への水素結合の効果は、フェノラート、カルボキシラート、ホスホラートなど、様々な配位子に対して一般的に成立することも明らかにし、研究成果は化学の領域に留まらず、分子内水素結合を持つ合成ポリカルボン酸が炭酸カルシウムやリン酸カルシウムの結晶表面に強固に結合することから、新規歯科材料の開発などにも至っている。

うえやま・のりかず　**プロフィール**

略歴：昭和 40 年 3 月大阪大学理学部を卒業、昭和 45 年 10 月同研究科博士課程を修了し理学博士の学位を取得。同年 10 月米国ブルックリン工科大学研究員、昭和 46 年 5 月米国カリフォルニア大学研究員、昭和 48 年 10 月湯川奨学生、日本学術振興会奨励研究員を経て昭和 50 年 5 月大阪大学理学部教務職員に採用され、昭和 55 年 4 月同助手、平成元年 5 月同講師、平成 2 年 12 月同助教授、平成 8 年 4 月同大学院理学研究科助教授に配置換後、平成 11 年 1 月同教授に就任。この間、多くの優秀な人材を輩出するとともに、最新機器の導入など、研究設備・環境の充実に努めた。

研究面では、「金属錯体の配位原子への水素結合」の基本原理を世界に先駆けて見出し、トランス影響による反応性の活性化と安定化の変換、金属イオンの捕集と解離機能の変換機構、無機結晶と高分子配位子の複合体界面の結合の強弱の制御など幅広い分野で国際的にもリードする成果をあげたことにより、平成 14 年日本化学会学術賞受賞。

有機合成40年

大学院理学研究科教授　小　田　雅　司

昭和39年（1964）に東北大学理学部化学科4年次生として、野副鉄男先生（昭和33年トロポノイド化学に関する業績で文化勲章受賞）の研究室に配属となって以来、構造、物性、機能の観点から興味深い新規な有機化合物の設計、合成を続けてきた。標記のタイトルは平凡であるが、葛飾北斎（画業74年？）、牧野富太郎博士（「植物学90年」）および野副先生（「有機化学70年」）などの、老年になってもヴァイタリティーあふれる偉大な先人を紹介することも意図した。

地球上の生物は、約38億年前、当時の海水中に恐らく濃厚に存在した各種有機化合物（炭素化合物）を基盤として発生し、以来今日まで進化を重ねてきた。このことだけでも有機化合物が優れた物性・機能を有すること、あるいは有しうることを十分に示している。さらに、染料、医薬品、プラスチック類など身の回りのいろいろな物品を見ても有機化合物の有用性が明白である。

元素としての炭素の特長は、①4価である、②多くの種類の元素と化学結合を形成する、③二重結合や三重結合など不飽和結合を形成する、④そして、多くの有機化合物は地球表面の環境で適度の安定性と化学反応性を有する、ことなどである。また、有機化合物の重要な物性・機能には水素結合に加えて不飽和結合のパイ電子が係わっている。有機化合物の最も簡単な系列は一般式 $C_nH_{(2n+2)}$ で表されるアルカンであるが、その構造異性体の理論数はnの増加とともに急速に増え、n＝100ともなると $1.37x10^{46}$ と正に天文学的数になる。他の一般式も併せて、有機化合物の理論数は無限大といえよう。19世紀に有機化学が発展を始めてから今日までに化学者が文献に記載した有機化合物の数は2000万を超えるだろう。この中にはDNA、タンパク質、テルペン類など生物起源の天然有機化合物も含まれるが、大部分は実験室で合成されたものである。有用、有益なものもあれば有毒、有害なものもある。無闇に合成することは無意味であるが、有意義な未知化合物は多数存在するだろう。

“有機合成化学”は、①新規な合成反応や合成方法の開発と、②新規な有意義化合物の合成・開発研究、に大別できる。我が国では①の分野に係わる研究者が多いが、②の分野も、科学技術や材料科学などとも関連して、近年発展を続けている。私の研究は②の分野に属し、簡単には「新規なパイ電子系化合物の、設計、合成、物性、および機能の研究」である。まず、どのような分子が興味深く有意義であるかの設計が重要である。設計された標的化合物の合成が最も時間と労力を要するところである。合成は登山にも似て、比較的容易な場合もあるが、険しくてルート探しに実験を担当する学生ともども苦心惨憺する場合も少なくない。それだけに登頂に成功した場合は喜びも大きい。如何に早く安全かつ最適なルートを見つけるか、経験と知恵の発揮所である。合成成功後も物性の測定や解析が待っているが、失敗すれば研究目的は達成されない。実験が順調な場合は良いが、不調が続く場合は、忍耐力を解き励ましながら如何にして順風に乗せるか、また、場合によっては撤退（含一時撤退）も必要な場合もあり、指導する立場の者にとって悩むところである。しかし、安易な撤退は教育的観点からも慎みたい。十分なデータがないと、ネガティブな結果の判断は難しい。経験、知識に照らし合わせて合成可能と確信できる場合は、一時不調でも、折に触れて試みる執拗さも必要である。

研究成果の詳細は略するが（実際には講義の半分強を占める）、40年の間に数多くの新規な化合物（主にパイ電子系）を合成した。標的にできるだけ基本的な化合物を選んだ基礎研究が主である。基本的化合物は、その物理的性質のみならず色々な反応を含む化学の展開もできる。楽しみながら研究を展開できることは、どの分野でも研究の駆動力であろう。

これらの成果のほとんどは、実験を担当した学生、学生の指導に携わった職員、ならびに学内、学外の共同研究者の努力や援助によるところが大きく、話を閉じるに当ってそれらの人々に感謝したい。

おだ・まさじ　プロフィール

略歴：昭和40年3月東北大学理学部卒、昭和42年東北大学大学院理学研究科修士課程修了後博士課程に進学し昭和45年3月同博士課程修了（理学博士）。昭和45年4月東北大学理学部助手に採用、昭和46-48年米国コロンビア大学博士研究員、昭和56年2月東北大学理学部助教授に昇任、続いて同年4月大阪大学理学部教授に就任、平成8年大阪大学大学院理学研究科教授（配置換え）。専門は有機化学（構造有機化学、合成有機化学）。学会は、日本化学会、有機合成化学協会、アメリカ化学会、イギリス化学会に所属。日本化学会理事、同会学術3誌編集委員等歴任。昭和50年日本化学会進歩賞受賞。

遺伝子工学そして共生工学

大学院情報科学研究科教授 室 岡 義 勝

私の研究は石油化学製品の微生物変換から、エーテル結合を有する6種類の新規アミノ酸を発見し、エーテル結合の生化学反応を解明したことに始まる。今でいうグリーンケミストリーの先駆けである。次に、硫黄化合物を分解する酵素の遺伝子制御機構の研究は、新規な2種類のレギュロンの発見に至り、生物界の硫黄代謝調節機構の独創的研究として評価された。この研究に端を発し、広範な細菌において遺伝子操作を可能にする生体内遺伝子操作技術を築いた。また、rRNAの定量法を確立する一方、11属細菌の宿主―ベクター系の開発、異種遺伝子の高発現ベクターとプロモーター検索用ベクターの開発により、遺伝子産物の高生産を可能にし、「遺伝子工学」の発展に先導的役割を寄与した。

これらの技術開発を基に、澱粉枝切り酵素がリポタンパク質である事と細胞外分泌機構を解明し、5-アミノレブリン酸合成酵素遺伝子研究からビタミンB12の代謝工学研究へ発展し、コレステロール酸化酵素遺伝子の構造解析、反応機構の解明、耐熱化、耐アルカリ化、基質特異性の変換などの酵素工学的研究により工業化に成功した。プロバイオティックスの研究は経口減感作細菌の育種に発展し、植物へのダニアレルゲンや大腸菌O157病原遺伝子導入による経口ワクチン開発研究と植物種子内のアミノ酸組成変換は、植物代謝工学、工業植物育種学の発展に貢献した。植物と微生物の共生による能力を、環境保全、持続的物質生産、生物農薬開発などへ活用する「共生工学」を提唱し、共生系を構築する情報伝達機構の研究を進展させ、「共生情報工学」の礎を築いた。

研究テーマと優秀な学生には事欠かず、思いつきと興味にまかせた雑多な研究を行った。しかし、技術開発の連続性と自分で発見または開発したものを大事に伸ばしてきたと思う。「共生工学」を発展させ、地球上の生物が互いに共存する社会を構築する夢を追い続けたい。

むろおか・よしかつ **プロフィール**

略歴：1942年1月広島生、1962年3月大阪大学大学院工学研究科醗酵工学専攻修士修了、工学博士、産業科学研究所助手、広島大学工学部助教授、教授を経て，1995年4月大阪大学工学研究科応用生物工学専攻教授、2002年4月より大学院情報科学研究科バイオ情報工学専攻教授、2004年3月定年退職。名誉教授。この間1970－1972年および1981－1982年米国国立保健研究所（NIH）客員研究員。1999－2003年生物工学国際交流センター長。日本農芸化学会奨励賞、生物工学賞などを受賞。学術審議会専門委員など各種委員を歴任。ニューヨークアカデミー会員。2004年4月より阪大サンフランシスコオフィース所長。

新部局長紹介

超高圧電子顕微鏡センター長

森　　博太郎
（もり　ひろたろう）

【略歴】
昭44. 3　名古屋工業大学金属工学科卒業
46. 3　大阪大学大学院工学研究科冶金学専攻修士課程修了
49. 3　大阪大学大学院工学研究科冶金学専攻博士課程単位取得退学
49. 4　名古屋工業大学講師工学部
51. 3　工学博士（大阪大学）
56. 4　大阪大学講師超高圧電子顕微鏡センター
58. 7　大阪大学助教授超高圧電子顕微鏡センター
平 7. 4　大阪大学教授超高圧電子顕微鏡センター
17. 4　大阪大学超高圧電子顕微鏡センター長（平19.3まで）

環境安全研究管理センター長

小　松　満　男
（こまつ　みつお）

【略歴】
昭42. 3　大阪大学工学部応用化学科卒業
44. 3　大阪大学大学院工学研究科応用化学専攻修士課程修了
44. 4　大阪大学助手工学部
49.12　工学博士（大阪大学）
61. 8　大阪大学助教授工学部
平 6.12　大阪大学教授工学部
10. 4　大阪大学教授大学院工学研究科
16. 4　大阪大学教授工学研究科附属原子分子イオン制御理工学研究センター（兼任）
17. 4　大阪大学環境安全研究管理センター長（平19.3まで）

新教授紹介

荻　野　美　穂　（おぎの　みほ）

所　　属：大学院文学研究科文化形態論専攻
　　日本学講座
専門分野：近現代女性史、ジェンダー論

【略歴】
昭43. 3 神戸女学院大学文学部卒業
57. 4 奈良女子大学文学部専攻生（～58.3まで）
60. 3 奈良女子大学大学院文学研究科修士課程修了
62. 3 奈良女子大学大学院人間文化研究科博士課程退学
62. 4 奈良女子大学助手大学院人間文化研究科
平 2. 4 奈良女子大学講師文学部
5. 4 奈良女子大学助教授文学部
8. 4 京都文教大学人間学部臨床心理学科助教授
12. 3 博士（人文科学）の学位授与（お茶の水女子大学）
12. 4 大阪大学助教授大学院文学研究科
17. 8 大阪大学教授大学院文学研究科

磯　　博　康　（いそ　ひろやす）

所　　属：大学院医学系研究科社会環境医学講座
　　（公衆衛生学）
専門分野：公衆衛生学

【略歴】
昭57. 3 筑波大学医学専門学群卒業
61. 3 筑波大学大学院博士課程医学研究科修了
63. 6 ミネソタ大学修士課程修了
63. 6 ミネソタ大学研究員
63. 9 大阪府立成人病センター
平 2. 4 筑波大学講師社会医学系
5. 6 筑波大学助教授社会医学系
14. 2 筑波大学教授社会医学系
16. 4 筑波大学教授大学院人間総合科学研究科
17. 7 大阪大学教授大学院医学系研究科

中　川　晋　作　（なかがわ　しんさく）

所　　属：大学院薬学研究科応用医療薬科学専攻
　　生体機能制御学講座
専門分野：薬剤学、DDS

【略歴】
昭57. 3 神戸学院大学薬学部卒業
59. 3 神戸学院大学大学院薬学研究科修士課程修了
59. 4 参天製薬株式会社中央研究所研究員（昭62.3まで）
63. 3 神戸学院大学大学院食品薬品総合科学研究科博士課程中退
63. 4 神戸学院大学薬学部実験助手
平 5. 4 大阪大学助手薬学部
5. 9 博士（薬学）（大阪大学）
6. 6 大阪大学講師薬学部
9. 3 カナダThe Toronto Hospital Research Institute研究員（平11.2まで）
11. 6 大阪大学助教授大学院薬学研究科
17. 7 大阪大学教授大学院薬学研究科

新教授紹介

菊　地　和　也　（きくち　かずや）

【略歴】
昭63. 3　東京大学薬学部卒業
平 6. 3　東京大学大学院薬学系研究科博士課程修了
9. 1　東京大学助手大学院薬学系研究科
12.12　東京大学助教授大学院薬学系研究科
17. 7　大阪大学教授大学院工学研究科

所　　属：大学院工学研究科生命先端工学専攻
専門分野：ケミカルバイオロジー

横　田　隆　司　（よこた　たかし）

【略歴】
昭58. 3　大阪大学工学部建築工学科卒業
60. 3　大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻博士前期課程修了
60. 4　大阪大学助手工学部
平 4. 1　博士（工学）（大阪大学）
10. 4　大阪大学助手大学院工学研究科
11. 4　大阪大学助教授大学院工学研究科
17. 7　大阪大学教授大学院工学研究科

所　　属：大学院工学研究科地球総合工学専攻
専門分野：建築計画、地域施設計画

東風西風

和而不同から四弘誓願へ

名誉教授　阿　部　　裕

過日阪大職員録を見て、名誉教授欄の第一頁にランクされているのを見、今さら乍ら我が高年令に驚かされた次第です。この80数年、仕事の内容は違え歩き続けた我が人生を振り返ってみて、その苦楽の跡を想起した。

私は一内科臨床医として生活してきたが、医師は患者さんより学び、診断・治療の方針を考え、よりよいものを実行し、成果を願う事の繰り返しを基本とする。私は昭和20年9月卒業、第一内科大学院に入学したが、当時の臨床習練はより多くの患者を診、大先生の診断、治療方針を伺い、五感の働きと経験の蓄積が己が実績につながっていたのは言う迄もない。しかし終戦後欧米図書の洪水から、診断情報の客観化の流れが作られ、これが私の後の中央検査室の創設関与につながった。その後、検査値の大量蓄積の中、大局的には、従来通りの経験から総合判断による科学的とは言い難い診断意志決定がなされ、一致しない所は個人差の名の下に分類された。さて当時、現代とは遥かに未熟であるがコンピュータの利用が話題となり、医学領域ではなじまないとされたが、私は工学部、基礎工学部の先生のご協力の下、これを用いて計測値から意志決定の道への客観化を模索しはじめた。

当時私は腎臓、循環動態のテーマを担当していたが、これらの計測手法では色素など種々のマーカーの稀釈、動態からその流れの量、容積を計測する事で行われた。これにはSimulation法による理論値と実測値とがよく一致する事からその方面の研究を始め、これが今日の画像診断の判断に至る解析の始まりとなっている。また多数の従属的、独立的計測値も多変量解析法でより判断確度を高める事ができた。これらのためにも計測法もより精度高く連続的、非浸襲的、さらには多次元的表示可能なものの開発が求められた（その間、人工膵島、超音波ドプラー法、臓器反射Spector画像表示などの私共の試行も次々と発表された）。これらの理論、計測技術は今日でも国内的、国際的にも広く臨床現場で活用されているのは喜ばしい。

定年後大学より公的医療機関の管理に関係することになったが、医療現場でのコンピュータの活用により医療機関、診療機能のシステム化、情報の電送化に努力、遠隔医療、救急医療や更には分化細分化するメディカルチームの整理、電子カルテへの活用へと研究は広がっていった。これらの組織作りには各々の部署で有能な人がチームを作り、これらが一つの大きな全体目的へとシステム形成と集約することが大切で、私は数多くの有力な仲間の協力によりトータルの成果を挙げ得た事に今も感謝と満足の気持ちを持っている。正に「和而不同」の成果と喜んでいる。この有能な仲間は現在数十人が大学教授として、また有力病院長や著名な臨床家として活躍していることを心秘かに誇りとしている。

さて公職退官後、今日、高齢化社会を迎え山積する諸問題のより良き対応が求められている。これには先ず医学面で過剰な疾病観及び過剰な健康観の内容分析が大切で、現実にはQOLに重点をおいた長続きする日常生活の設計を技術面（介助ME機器など）、社会面（年金問題も含め）、及び個人の意識面で考える事が大切である。

最近私は老人グループ、老人ホームへ意見を求められる事が多くなったが、多くの健康感を持った老人に先ず個人の生きている限り心の積極性を持つ事、これは正に仏典で言う「四弘誓願」の心づもりを持つ事が大切と考えている。

「四弘誓願」

衆生無辺誓願度
煩悩無数誓願断
法門無尽誓願学
仏道無上誓願成

凡人は生きている限り絶えずこの心で毎日を思い、努め、楽しむ事が大切と思っている。

即ち私訳すれば生き抜こうとする念願と共に、これに反する諸々の煩悩、欲望を抑え、その間各人それぞれに持つ技術、趣味などを可能な限り努力し続け、そして生涯を悟りとまで言わなくとも穏やかな心の中で、生と死は必ず唯一回、対になって与えられている事から、時には人生とはなんぞやから生命感、人生観たまには無限の神秘を感じる宇宙観にふと思いを致し、そして可能な限り若壮老と共に社会の中の一員として交流し続ける事が大切で、高齢者は特にこれが行える身近なサークル活動の輪の中に入ることを奨めている。

四弘誓願、正に高齢者はもとより今日の進歩、多様化する社会で散見する生活目的意識の低い若年者、多忙の中に道徳観をより高く求めたい壮年者にも必要な心掛けではないだろうか！

あべ・ひろし　プロフィール
医学部名誉教授　昭和59年退官　専門：内科、循環器科

名誉教授の近況

大　髙　順　雄 （言・H7 退官）	2001 年度フランス政府「学術功労章」palmes académiques の officier に昇格されました。（chevalier には 1987 年に任じられております。） 大手前大学社会文化学部教授 主として中世フランス語・文学の文献学的研究。 　共著書：Roman d' Alexandre en prose ［British Library Roy. 15. E. VI］（大手前大学交流文化研究所、2003 年 6 月） 　論　文：La locution distributivo-juxtapositive en occitan 　国際叙事詩学会日本支部会長 副として現代中国語・文学の文献学的研究。 　論　文：西欧人名的漢訳規則－分類資料－（大手前大学社会文化学部論集 5、2005 年 4 月） 　共訳書：郭沫若『桜花書簡』（東京図書出版会、2005 年 6 月）
大　村　英　昭 （人・H12 退官）	阪大退職後に来きました関西学院大学社会学部にも、はや五年間が過ぎますが、3 年前には「21 世紀 COE プログラム」に採択された－タイトルは「人類の幸福に資する社会調査」－こともあり、お蔭で忙しく研究活動させてもらっております。
權　田　俊　一 （産・H12 退官）	私は 2000 年 3 月に停年退官し、その後福井工業大学宇宙通信工学科に勤務しています。この 4 月に、大学院修士課程の学生 1 名を担当することになったので、実験を始めることにしました。今まで手がけていた半導体レーザに宇宙通信、福井県というキーワードを加えたテーマを選びました。つまり、宇宙に多いプロトン線を半導体レーザに照射した効果を調べようというものです。プロトン線は福井県の若狭湾エネルギー研究センターで照射します。ゼロからのスタートでしたが、阪大その他の皆さんのご協力を頂いて、準備は順調に進んでいます。手作りで装置を準備するなど、かしこまった研究というより、趣味の領域の面白さを感じ、楽しんでいます。
井　口　征　士 （院基・H15 退官）	定年後、広島国際大学に赴任しましたが、今年宝塚造形芸術大学に帰ってきました。自宅近くにある大学で、メディア・コンテンツ学部に所属しています。学会活動として電子情報通信学会で「フェロー＆マスターズ未来技術研究会」を立ち上げました。ゴルフならシニアツアー、野球ならマスターズリーグといった位置づけの、IT 分野のベテラン？の研究会です。朝日新聞に紹介されたおかげで、大阪で行われた第 1 回研究会は、若手参加者が多く大盛況でした。次回は企業出身のフェロー 4 名による「今だから言う、私の失敗体験」特集です。 名誉教授の先生方におかれましても、若者たちに伝えたい貴重なお話をいただければ幸いです。
柏　木　哲　夫 （院人・H15 退官）	2004 年 4 月から名古屋の金城学院大学の学長をしています。大学は 116 年の歴史を持つミッションスクール（女子大）で、5 学部、5000 人あまりの学生が学んでいます。2005 年 4 月には新しく薬学部が開学しました。 少子化の時代、私立大学は学生の確保が大変です。幸い、まだ定員割れの学部はありませんが、2007 年の大学全入時代を目前にして、大学として何か新しい事に目を向け続けることを要求されます。 新幹線ののぞみが速く、多くなったので、ホテル住まいをしながら通勤しています。

徂　徠　道　夫 （院理・H15 退官）	自宅で本（朝倉化学大系）や論文を書いたり、日本化学会編『化学便覧・基礎編・改訂 5 版』（丸善）や日本熱測定学会編『Comprehensive Handbook of Calorimetry and Thermal Analysis』（John Wiley & Sons）の編集を担当しました。米国化学会の Chemical Reviews 誌からの要請で、6 月下旬に分子磁性体の相転移に関する長大なレヴューを投稿しました。放送大学講座「物質の科学・反応と物性」の中の「相転移」を担当して 7 年になります。2007 年まで放送されます。年に 1 回くらいのペースで国際会議に出席し、海外を楽しんでいます。
松　尾　隆　祐 （院理・H15 退官）	退官しまして、大学が社会の中で文化の拠点として果す役割を一段と強く感じております。 お蔭様で週 3 回の勤務を元気にこなしています。仕事のうえで現役の先生方、ご退官された先生方にお世話になっております。定年後の楽しみとして、現役時代には近くの領域におりながら理解せずに過ごした分野の勉強を助手時代のように、たとえて申しますと自分で計算できるようになるまで、したいと思っています。
伊　井　春　樹 （院文・H16 退官）	平成 16 年 3 月に定年によって大阪大学文学研究科を辞した後、法人化によって発足した大学共同利用機関法人人間文化研究機構の理事に任命され、本部のある虎ノ門に通う身となった。ところが、今年 4 月からは、機構を構成する機関の国文学研究資料館長に選ばれ、今度は品川通いである。我が国における、人文学研究をどのようにするのか、とりわけ自然科学との融合において、文学研究の再生を考える必要がある。19 年 10 月には立川の新しい建物が完成する予定で、移転も現実味を帯びるようになった。さまざまな課題に、現在は取り組み、休む時もない状況である。
塩　澤　俊　之 （院工・H16 退官）	定年退官後、名古屋市の郊外にある中部大学に勤務しております。幸い、素晴らしい大学の環境と良き同僚に恵まれ、元気に第二の人生を送っています。昨年 1 月、ライフワークの一冊として長年温めてきました英文著書『Classical Relativistic Electrodynamics ― Theory of Light Emission and Application to Free ― Electron Lasers』（Advanced Texts in Physics）をドイツのシュプリンガーから出版しました。本書は、自由電子レーザ、高エネルギー物理学、加速器物理学などの分野で世界の中心的な役割を果たしている数多くの研究機関や大学の図書館に収蔵されています。相対論的電磁理論とその応用について感心のある方には、是非ともご一読頂ければ幸いです。

稔野宗次名誉教授（工学部）逝去

本学名誉教授稔野宗次先生は、平成17年6月18日(土)脳腫瘍のため逝去されました。享年81歳。

先生は、大正13年12月9日大阪府にお生まれになり、昭和22年9月大阪帝国大学工学部冶金学科をご卒業、昭和24年9月同大学大学院特別研究生第1期、昭和27年9月同第2期を修了された後、同年10月大阪大学工学部助手となられ、昭和37年4月同助教授を経て、昭和39年7月同教授にご就任、冶金学第1講座（昭和50年4月より金属材料工学第1講座に改組、金属物性工学）を担当され、昭和63年3月に停年退官されました。この間、昭和30年9月より3年間、米国ノースウエスタン大学工学部に大学院学生として、また、昭和38年8月より1年8ヶ月間、米国ウィスコンシン州Marquette大学に準教授として過ごされました。その後、帝京大学理工学部において、平成元年3月1日から同6年3月31日まで教授として勤められました。

この間、先生は、金属物性工学の教育と研究に努められ、優れた研究成果を挙げられ、優れた人材を世に送り出されました。また、先生は、学問に対する真摯な態度で、多くの学生、研究者に深い感銘を与えられました。

先生は、特に、金属における原子空孔、金属間化合物の強度、固相における相変態など金属物性工学に関する研究に力を入れられました。

まず、理論的な予想にとどまっていた金属結晶における原子空孔の存在について研究され、金属アルミニウムを用いて平衡濃度を直接的な実験方法により初めて測定することに成功され、原子空孔の存在を実証されました。

耐熱超合金の基本である一連のニッケル基$L1_2$型金属間化合物の高温強度に関する研究では、強化機構の解明に貢献され、また、固相の相変態に関する研究では、オーステナイト系耐熱鋼におけるシグマ相生成の際の母相との結晶方位関係を実験的に確立され、シグマ相析出の機構を解明されました。この研究はシグマ相に起因する耐熱鋼劣化を阻止するための基礎研究として高く評価され、昭和39年日本金属学会論文賞を受けられています。

次に、電界イオン顕微鏡（FIM）法による合金構造の研究では、FIM法をわが国では最も早く本格的に金属学に適用して、上記ニッケル基合金系の微視的構造を、原子レベルで解明することに成功されるとともに、FIM像の解析方法を確立して、FIM法を金属学研究に適用できる基礎を与えられました。これにより、他の方法では解明することが困難な超微細組織の問題を多数解明されました。

さらに、各種形状記憶合金の研究では、形状記憶効果と熱弾性マルテンサイト変態との関係を実験および理論の両面から研究し、形状記憶効果の機構解明に重要な成果を上げられました。

以上の諸研究に対して昭和62年日本金属学会谷川・ハリス賞を受賞しておられます。

学内においては、国際交流委員会委員、低温センター運営委員会委員を務められました。特に低温センター低温脆性試験機室については、計画の段階から、昭和54年設置以来ご退官までその運営ワーキンググループの主査として同試験機室の充実に尽力されました。また、工学部内でも、各種委員を多数歴任されました。

学外においては、全国大学金属関係教室協議会副会長を務めるとともに、日本金属学会、日本鉄鋼協会、日本学術振興会耐熱金属材料第123委員会の各種委員を務められるなどわが国の学術および学協会の発展に貢献されました。また本学工学部と米国ノースウエスタン大学工学部との学術交流に尽力されたほか、各種学術国際交流会議の組織委員を務められ、他方、国際学術誌Journal of the Less-Common Metalsの編集委員を長年務めるなど国際学術交流にも貢献しておられます。

これらのご功績により、平成15年11月に瑞宝中綬章を叙勲されています。

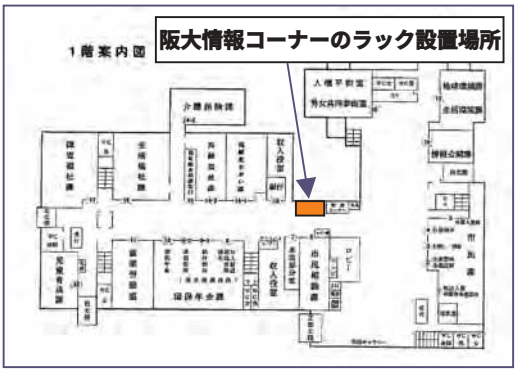
いつもにこにこと後進を励まされながら、「清く、正しく、美しく」という言葉が本当にふさわしい、八十年余りの人生を送られました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

阪大情報コーナーの設置！

広報委員会では、今年度の広報活動の主要事項の一つとして掲げている地域推進の強化のため、吹田市役所１階に、阪大情報コーナーを８月１日から開設しました。

現在、ラックには、阪大ニューズレター、大阪大学案内、大学要覧等の広報誌を中心に置いています。　吹田市と阪大は、同市が推進する「大学のあるまちづくり」事業の連携協力を昨年10月に締結しており、地域・市民に阪大の情報を積極的に提供をしようと考えています。



平成16年度　入構・駐車整理業務収支決算について

このことについて、次のとおり監査委員から大阪大学施設マネジメント委員会に対し報告が行われ承認されました。
なお、差引残高については、平成17年度に繰り越すこととなりました。

単位：円

収　　入		支　　出	
事前申請分	95,736,150	人　件　費	
		業務委託料	86,782,380
当日申請分	27,868,800	人　件　費	1,228,508
		小　計	88,010,888
預 金 利 息	459		
		物　件　費	
		消 耗 品 費	295,022
		修　繕　費	158,708
		印刷製本費	2,287,971
		小　計	2,741,701
		そ　の　他	
		雑　　費	2,540,245
		小　計	2,540,245
合　　計	123,605,409	合　　計	93,292,834
		収 支 差 引	30,312,575
前年度繰越分	16,036,051	差 引 残 高	46,348,626

第37回　大阪大学中之島講座の実施について

今年度の公開講座「中之島講座」は、下記のとおり開催されます。

1．趣　　旨

この公開講座は、現代の科学・技術の急速な発展、政治・経済の激しい変化や生活様式の変容の中で、大学の研究成果を広く一般市民・学生の皆様に開放し、生活・職業上の必要な知識の普及と一般教養の向上に資するために企画されたものです。

2．主　　題・講義内容、講義日時、講義題目及び講師

☆主題A）「安全・安心と現代社会（事故と天災）」

事故や天災は、人間の知恵や技術を使って避けること・防ぐことができないものなのか。

万一、そうした予期せぬ自然災害や大きな人災・事故に遭遇したとしても、その被害を最小限に抑えることは可能であろう。そのためには、私たちは日常生活においてどのような心構え、対処の仕方、防災対策を考えておかねばならないのだろうか。5つの講義を通して、ソフト面からハード面の両面にわたりさまざまな観点から検討してみたい。

講義日時	区分	講　義　題　目	講　師
10月4日（火） 午後6時～8時	1	文学のなかの津波－小泉八雲「生神様」と「稲むらの火」	文学研究科教授 玉　井　　暲
10月11日（火） 午後6時～8時	2	事故・ヒューマンエラーの心理学	人間科学研究科教授 臼　井　伸之介
10月18日（火） 午後6時～8時	3	統計現象としての地震	理学研究科教授 川　村　　光
10月20日（木） 午後6時～8時	4	現代社会と都市・建築の耐震安全性 ～方丈記に見る安全・安心～	工学研究科助教授 馬　場　研　介
10月25日（火） 午後6時～8時	5	直下型地震下および復旧後における鋼構造物の安全性評価研究最前線	接合科学研究所教授 金　　裕　哲

☆主題B）「安全・安心と現代社会（健康）」

従来、人の健康にかかわる環境やくすりなどは安全なもの、安心なものと思われてきた。

しかし、現代社会においてはこの考えに疑問が投げかけられ、自分の体は自分で守らなければならない。

5回の講義を通じて、くすりによる治療の基本的原理やストレスから来る心の病（不安やうつ）に対する薬物治療、さらに現代社会から多大なストレスを受けている子供について、また、人の体を支えているリズム（体内時計）により、心身の安全・安心をもたらすこと、最後に、ストレスを創生への原動力とする考えについて検討してみたい。

講義日時	区分	講　義　題　目	講　師
11月1日（火） 午後6時～8時	1	くすりを安全に使うために	歯学研究科教授 上　崎　善　規
11月15日（火） 午後6時～8時	2	心の病とくすり	薬学研究科教授 松　田　敏　夫
11月29日（火） 午後6時～8時	3	安心・安全な社会と子ども －未来を生きる子どもたちを育てるために－	医学系研究科教授 永　井　利三郎
12月1日（木） 午後6時～8時	4	体内時計と心身の健康	蛋白質研究所教授 永　井　克　也
12月6日（火） 午後6時～8時	5	ストレスとアフォーダンス－自然共生化学の一視点－	基礎工学研究科教授 久保井　亮　一

☆主題C）「安全・安心と現代社会（セキュリティー）」

現代社会がますます複雑になってゆく今日にあって、安全性の確保・保証という問題は最大の関心事であろう。

「安全・安心」は、企業が扱うビジネスにもなりうるし、情報・通信・運搬等のネットワークの生命を握る要ともなるだろうし、また、国際的政治社会や危機管理機構にあっては不可避の課題でもあるだろう。本講義では、こうした現代社会が抱えているセキュリティー問題の諸相を、各専門分野における最新の研究成果をふまえて多面的に検討してみたい。

講義日時	区分	講　義　題　目	講　師
12月8日（木） 午後6時～8時	1	企業の戦略的社会性	経済学研究科教授 金　井　一　賴
12月13日（火） 午後6時～8時	2	安全のための設計（海上安全からの新しいコンセプト）	工学研究科助教授 梅　田　直　哉
12月15日（木） 午後6時～8時	3	ヒューマン・セキュリティ	国際公共政策研究科助教授 栗　栖　薫　子
12月20日（火） 午後6時～8時	4	広域監視のための視覚情報処理技術	産業科学研究所教授 八　木　康　史
12月22日（木） 午後6時～8時	5	セキュア・ネットワーク構築のための人材育成	サイバーメディアセンター助教授 馬　場　健　一

3．場　　所

大阪大学中之島センター　7階　講義室2　大阪市北区中之島4-3-53

TEL　06（6444）2100　　URL http://www.onc.osaka-u.ac.jp

4．対象者及び定員

一般市民・学生　　各主題別定員80名　　先着順

5．講習料（テキスト代及び消費税を含む。）

・1セット（1主題・5講義）だけ選択して受講する場合　　6,200円

・2セット（2主題・10講義）を選択して受講する場合　　8,200円

・3セット（3主題・15講義）全てを選択して受講する場合　　10,200円

6．受講証書

各主題の講義5回のうち4回以上受講された方に、受講証書を1枚授与いたします。

すべての主題（3セット）に申し込まれ、上述の条件を満たされた方には3枚受講証書が授与されますので、奮ってお申し込みください。

7．申込方法

①下記受付期間中に所定の「受講申込書」に必要事項をご記入のうえ、郵送またはファクシミリで送付願います。
受講申込書の記載事項を確認したうえで、折り返し受講決定通知の連絡を電話もしくはEメールにて行います。

②受講決定の連絡を受けた方は、期日までに講習料を次の指定振込銀行口座へ受講者の御氏名で振込み願います。

③なお、振込みによる手数料等につきましては、受講者負担とさせていただきますので、ご了承願います。

口 座 名：ＵＦＪ銀行茨木支店　普通預金　1289484

口座名義：大阪大学研究推進課

○受付期間：

主題A）「安全・安心と現代社会（事故と天災）」

9月20日（火）～9月27日（火）必着（但し、土・日・祝祭日を除く平日のみ）

主題B）「安全・安心と現代社会（健康）」

10月18日（火）～10月25日（火）必着（但し、土・日・祝祭日を除く平日のみ）

主題C）「安全・安心と現代社会（セキュリティー）」

11月24日（木）～12月1日（木）必着（但し、土・日・祝祭日を除く平日のみ）

8．お問い合わせ及びお申し込み先

〒565-0871　吹田市山田丘1番1号

大阪大学研究推進・国際部研究推進課　中之島講座担当宛

TEL　06（6879）7034　　FAX　06（6879）7039

E-mail:kenkyusuisinkikaku@ns.jim.osaka-u.ac.jp

詳しくは、大阪大学研究協力情報ホームページ（http://kenkyo.jim.osaka-u.ac.jp）をご参照ください。

9．その他

テキストの配付は、各主題別に開講される初回講義の受付時にお渡しいたします。

第９回関西科学技術セミナー「市民のための科学技術」

開催日：2005年11月8日(火)・9日(水)
8日　セミナー
会　場：大阪大学コンベンションセンター３階　MOホール
講演者：有本　建男（内閣府経済社会総合研究所総括政策研究官）
驚田　清一（大阪大学理事・副学長）
田中　良和（サントリー(株)先進技術応用研究所
シニアスペシャリスト）
塚本　昌彦（神戸大学工学部教授）
稲葉　一人（科学技術文明研究所特別研究員、元判事）
小林　傳司（大阪大学CSCD教授）
平田オリザ（大阪大学CSCD客員教授）
上村多恵子（(社)関西経済同友会監事
京南倉庫(株)代表取締役社長）
9日　テクニカル・ビジット
会　場：大阪大学医学部附属病院未来医療センター　他

問い合わせ先
(社)関西経済同友会内関西サイエンス・フォーラム内
関西科学技術セミナー企画会議事務局
TEL：06-6444-3777　FAX：06-6441-1030
E-mail:ksf@kansaidoyukai.or.jp　http://www.kansaidoyukai.or.jp/ksf/ksfindex.htm

総合学術博物館　第４回企画展
「時空のなぞ　～アインシュタイン・イヤーによせて～」

開催日：2005年9月18日(日)～9月25日(日)　10時～17時
場　所：大阪大学中之島センター　10階　佐治敬三メモリアルホール　他
大阪市北区中之島４－３－53　TEL：06(6444)2100
大阪市科学館研修室
大阪市北区中之島４－２－１　TEL：06(6444)5656
・ミニレクチャー（講演）：大阪大学中之島センター　7階　講義室３
・模擬裁判：大阪大学中之島センター　7階　模擬法廷
・展示ブース：大阪大学中之島センター　10階　佐治敬三メモリアルホール
・親子科学教室：大阪市立科学館研修室
入場無料
問い合わせ先：総合学術博物館研修室　TEL：06(6850)6715

詳細は以下のURLをご覧ください。
http://www.museum.osaka-u.ac.jp/jp/index.html
大阪大学中之島センター　http://www.onc.osaka-u.ac.jp
大阪市立科学館　http://www.sci-museum.kita.osaka.jp/

待兼山修景整備計画に伴う待兼山５号墳の発掘調査を開始しました

大阪大学埋蔵文化財調査室では、大阪府豊中市に所在する大阪大学豊中キャンパスにおける待兼山周辺修景整備工事に伴い、影響が予想される待兼山５号墳をはじめとする周知の包蔵地（待兼山遺跡）を対象として、2005年７月よりおよそ２ヶ月にわたる発掘調査に着手しました。

詳細はこちら
http://www.let.osaka-u.ac.jp/maibun/matikaneyama5/index-matikaneyama5.htm
大阪大学埋蔵文化財調査室
http://www.let.osaka-u.ac.jp/maibun/index-maibun.htm

第10回上海交通大学との学術交流セミナーの開催について

趣　　旨：平成６年10月に大学間学術交流協定を締結した上海交通大学（中華人民共和国）と協定に基づき継続して実施している唯一の実質的な交流事業である。
毎年、テーマを決めて、本学と同大学の間で交互に企画・実施を担当し実施している相互交流事業である。今年度は第10回開催記念にあたり、21世紀COEプログラムの４分野に関する交流セミナーに加え、両大学の緊密な連携を見据えた今後のより幅広い学術交流を促進するための討議も行う。
交流分野：Nano Science and Technology, Chemistry, Information, Materialの４分野
開催期間：平成17年11月24日(木)～11月25日(金)
開催場所：上海交通大学（中華人民共和国）
実行委員長：宮本　欽生（接合科学研究所）
上海交通大学とのコンタクトパーソン：古城　紀雄（留学生センター）
問い合わせ先：事務局研究推進・国際部国際交流課国際交流推進係（内線7038）

訂正とお詫び

阪大Now No.83（2005年６月号）に掲載の訃報の内容に一部誤りがありましたので、下記のとおり訂正するとともにお詫びいたします。

・阪大Now　No.83－60の訃報中
（誤）安　場　安　吉　　（正）安　場　保　吉

今月からの新連載。各方面で活躍する教職員・学生を取り上げます。トップバッターは、
第45次南極観測の女性越冬隊員として阪大から初めて参加した山本有佐さんです。

南極観測隊に参加して

学生部学務課　山　本　有　佐

昭和基地に山本さんたち隊員が建てた衛星アンテナと建物

―南極へ行く動機、きっかけは。旅や登山が趣味。特に知らない世界に足を踏み入れることが好き。工学部の山岡さん（注：環境・エネルギー工学専攻所属の山岡信夫さん、1998年の第40次に参加）が観測隊に参加されるのを知り、南極観測が文部科学省管轄の事業であること、大学職員にも観測隊参加の道が開かれていることを知った。

―志願したということ。どうしても参加したくて5年間くらい希望を出し続けた。やっと熱意が通じた。（笑）

―派遣期間はどれくらいか。2003年11月～2005年3月の1年4ヶ月（うち南極滞在は2003年12月～2005年2月の1年2ヶ月）。（注：観測船「しらせ」の往復に各1ヶ月かかる。）

―越冬隊参加メンバーのうち女性は何人か。3名（研究者、医師、設営一般）と同行者（報道関係者）1名の計4名。

―健康に自信がないと行けないと聞いたが。選考には内科外科健診だけでなく、精神鑑定、カウンセラーによるカウンセリングを含めた厳しい健康診断があります。越冬隊員には内科医1名、外科医1名がいるが、南極でできる治療には限度があります。一昨年から夏にドームふじ基地に航空機で人員を輸送する手段がとられはじめたが、昭和基地は人員物資共に南極観測船しらせが1年に1便あるだけです。しらせが去った後、次にしらせが来るまでの11ヶ月、何が起ころうとも救助はない。その期間を無事乗り越えることができる心身の健康さが絶対条件です。

―合宿ではどんなことを。冬訓練：耐寒訓練（雪山で非常用テントとシュラフで一夜過ごす）、フィールド訓練（地図、コンパスを使ったルート工作、レスキュー訓練）。夏訓練：消火訓練、救命救急訓練、その他：ブルドーザー、ショベルカー、クレーン車の操縦や運転も。南極では男性、女性の区別なく全員が同じことをしないといけない。今でも力仕事には自信があります。（笑）

―基地はどんなところか。昭和基地は、南極大陸からオングル海峡で5キロほど隔たった東オングル島にある。年平均気温マイナス10度。露岩地帯で、夏は4輪トラックも走る。夏は大陸との間の海が開くので、大陸から孤立するが、冬になると海が厚い氷で覆われ、スノーモビルや雪上車で大陸に上陸出来るようになる。ドームふじ基地は、内陸1000キロ標高3800mにある。年平均気温マイナス50度。この2年ほどは、冬は閉鎖し、夏だけ開いている。基地の下には岩盤まで3030mの氷があり、観測隊ではこの氷を連続して採取するプロジェクトが進行している。現在1850mまで掘り進め、このあたりで14万年前のもの、岩盤付近では100万年前のものが採取される予定。

―南極での日常生活は。私たちの隊が建てたインテルサット衛星アンテナは基地生活に大きな変化をもたらせた。アンテナ設置よりインターネットが使えるようになり、大容量のデータの送受信も出来るようになった。

地吹雪の中を進む雪上車。10m先が見えないこともある。

これまで1年間ためて船で持ち帰っていた観測データを衛星回線を通じて日本に送ったり、インターネットで調べごとをしたり、南極の雲の動きのシミュレーション画像を入手し天気予報に役立てたり、日本の整形外科とテレビ電話することにより専門医師の診断を仰ぐ遠隔医療の試行がなされたりなどした。

南極では共同生活や厳しい自然環境により、制限される自由が多い。その分、全員参加のスポーツ大会や誕生会、自由参加のバーやカラオケ、映画上映会などの行事が多く用意されている。

――南極ではどんな仕事を担当していたのか。主担当は、基地の装備品の保守・管理、隊員へのレスキュー指導・安全教育、ルート整備であるが、自分の担当よりも全体の中での仕事の方がウェイトが高い。基地の新しい設備・建物の建設、中継拠点旅行に参加し燃料ドラム缶輸送、ドームふじ旅行に参加し氷の掘削、野外に止めてある雪に埋もれたそりのスコップでの掘り出しなど。(注:「旅行」とは野外活動のこと。)

――いまの仕事に役立っている点は。今はパソコン相手の仕事、力仕事がなくて能力が発揮できていない?(笑)

――普段はどんなことを考えているのか。物資補給と人員交替が1年に一度なので南極が地球の孤島であることは今も昔も変わりないが、インターネットが使用可能となってから情報についてはもはや孤島ではなくなった。インターネットショッピングも可能、南極には届かないけれど。基地の外の自然環境は今も昔も変わらず厳しい。天候条件に加え、基地が島にあることから行動範囲は限定されている。したかったことは柔らかい日差しの下、緑あふれる公園を犬と散歩すること。

掘削ドリルから地下1500m附近の氷を出す作業。左から2人目が山本さん。

ドームふじ基地の増築作業。鉄板をかぶせると部屋が完成する。

――一番感動したことは。毎日マイナス40～60度で地吹雪の吹き荒れる悪天候の中を雪上車で旅行し、旅行も終盤になったある日突然360度氷しかない景色が現れたときのその美しさには涙しそうだった。それから体を動かし働くことの楽しさ、ものを作ることの喜びを知ったこと、世界最高レベルの掘削チームと共に氷の掘削をし、日本女性初のドリラーとなったことは南極で得た宝。

――びっくりしたことは。灯油が凍るマイナス50度、自分は生きているのに肌が凍り出す凍傷、氷の上を風で飛ばされる雪がシャラシャラと金属音をたてる寒さ。標高3800mのドーム基地での息切れする暮らし。空を見ていて月が沈まない日があることにある日気づいたこと。

――南極から持ち帰ったり、秘密にしないといけないことがあると聞いたが。石は持ち帰ってはならない。観測データにつながるものは自分の判断で公表してはならないことになっている。

――将来の夢は。宇宙かな?それともう一つ、南極の経験を生かして、子供達に生き抜く強さと生きる意志を持たせる活動がしたい。

<コメント>　たくましい女性とは彼女のような人を言うのだろう。南極のことを話すときの目はきらきら輝いている。阪大にも壮大な夢を追いかける女性がいたことに元気づけられる思いがした。

南極観測　ホームページ

http://www.nipr.ac.jp/jare/

南極プロジェクト　ホームページ

http://www.asahi.com/nankyoku/

やまもと・ありさ　プロフィール

平成8年4月大阪大学工学部に採用。医学部のときに南極観測隊に参加。今年4月から現職。

Dag Groningen

グローニンゲン事務所　地　石　雅　彦

4月号及び6月号で紹介されたサンフランシスコ事務所に引き続き、本学がヨーロッパに設置したオランダ・グローニンゲン事務所について紹介いたします。

グローニンゲンの主立った紹介は昨年度拠点設置のために奔走された木本さん（現：学生交流推進課）の記事に掲載されていますので、今回はその他の事項を中心にグローニンゲン事務所の紹介をしたいと思います。

〈グローニンゲンって？〉

日本ではあまり馴染みのない名前ですが、オランダでは大学の町として有名です。グローニンゲンはオランダ北部にあり、オランダの首都であるアムステルダムから電車で約2時間程度の距離に位置しています。

また、グローニンゲン大学は、1614年に設立され、オランダでは日本語の研究で有名なライデン大学の次に古い大学です。本学とは、2002年に大学間交流協定が締結され、教員の研究活動及び学生の交換留学により、積極的な交流が行われています。

〈グローニンゲン大学と大阪大学との深い関係〉

このお話は藤原先生（グローニンゲン事務所所長）と塚本課長（国際交流課）から伺ったものですが、二つの大学は実は昔からかなり深い関係があったそうです。

江戸時代末期、時の日本政府は積極的に西洋技術を導入することを決め、欧米から様々な技師・科学者を招へいし、西洋の最先端教育を行うこととしました。

医学界においても、各地から優秀な医師を招き入れましたが、本学附属病院の前身である文部省直轄病院にも、オランダから数名の医師が招へいされました。その中の2名（ボードウィン：A. F. Bauduin及びエルメレンスD. J. Ermerins）は、グローニンゲン大学で医学博士を取得した後に、オランダ政府からの推薦で日本へ派遣され、同病院へ着任したそうです。当時の病院長であった緒方惟準とともに、ボードウィンは当時の政府から大阪での勤務が命じられ、その後、後任として来日したエルメレンスと共に本学附属病院の基礎を築きました。

なお、当時の辞令書は吹田キャンパス銀杏会館1階の展示室に掲示されています。またエルメレンスの記念碑が医学部前に設置されています。

〈オフィス〉

さて、ここから歴史を幕末から現代に移したいと思います。

グローニンゲン事務所は、グローニンゲン市内から少し離れた場所に位置するZernikeキャンパス内に設けられました。このキャンパスにはグローニンゲン大学の理系学部や経済学部があるほか、Hanzehogeschool Groningen（オランダの高等専門学校の1つ）も設置されており、大学の別キャンパスと言うよりは、学研地区にグローニンゲン大学の一部が設けられたという説明の方が良いようです。

事務所は同キャンパス内の、産学連携オフィス（Transfer Liason Group）やオランダ北部科学技術センターが入るビルの2階に位置しています。この原稿を書いている7月は、快適な天候で、事務所から眺める景色は緑豊かで吹田キャンパスから見る風景に相通ずるものがあるかもしれません。ただし、冬が近づくにつれて、ヨーロッパ北部に特有の強い風が吹き荒れ、薄暗い空となり、気が滅入ってしまうことも考えられます。しかし、当面の間はそんなことも気にせず、快適な夏を味わいたいと思います。

〈活動計画〉

オランダへ到着後の4月から、各種手続き（事務所として賃借している部屋の契約や銀行口座の開設等）に着手しました。ヨーロッパにおける時間の流れが、日本における

事務所外観

事務所内部①

事務所内部②

ものとは異なっていることを再認識させられる日々が続いています。私が以前、本学が実施する海外研修制度の支援でイギリスに滞在した際は、学生としての語学研修や事務所での研修が目的でした。部屋を借りる際の契約事や各種手続きについては、個人として行っていたので、多少の時間の流れは大目に見ることができ、逆にそれを文化の違いとして楽しむことができました。しかしながら、オランダと日本との間に立ち、仕事として契約書を取り交わすこととなど、実際の職務を行ってみると、異文化を楽しむというよりは、両文化の狭間に落ち込んでしまい、その違いに戸惑ってしまうことのほうが多いのが正直なところです。例えば、ヨーロッパのバカンスは長いことで有名ですが、オランダの人たちは通常で3週間程度の夏休み休暇を過ごします。子供がいる家庭では状況に合わせてもう少し伸びることもあります（これも拠点から本学に報告し、本学で検討していただきたい重要点でしょうか？）。家庭を大事にするオランダでのバカンスの重要度は、日本とは全く比較にならない次元であり、仕事の打ち合わせなどをバカンスまでに終わらせなければ、次の打ち合わせは1ヶ月後。という状況になってしまいます。

このように現段階では、主として各種契約事項及び10月に開催予定の開所式及び共同シンポジウムの開催（後述）に向けた準備を主な業務として忙しい毎日を過ごしています。事務所として行う他の活動計画は、ヨーロッパにおける活動拠点としてのメリットを最大限に活用できるように、以下のような事項を検討しています。

―阪大生の海外留学促進プログラム

現在、工学部を中心としてアメリカでの短期語学プログラムが実施されていますが、同様のプログラムをヨーロッパで実施することを検討しています。

―ヨーロッパの学生の動向調査

本学では、ヨーロッパからの受入学生数は多いとは言えないことから、どのようなプログラムが学生に求められているか調査を行う予定です。また、日本との共同プロジェクト（奨学金プログラムなど）の可能性についても検討を行う予定です。

―教員の共同プロジェクト

今年実施する予定の共同シンポジウム（グローニンゲン大学と共催）のように、ヨーロッパの大学と本学教員との共同プロジェクトのサポートオフィスとしての機能を目指します。

市庁舎前の模様

開所式会場（AULA）

〈オランダ語〉

オランダでの公用語は当然オランダ語なのですが、ほぼ全土で英語が通じます。ただし、書類が英語で書かれているのは外国人向けの書類など、オランダ語がわからない人を対象とした場合だけです。通常はオランダ語で記載されていることが多く、知っておいた方が当然便利です。例えば、バス停でバスが時間通りに来ないのは、サービスが悪いのではなく、夏休みのためサービスが異なるのであり、このこともオランダ語の案内を見なければわかりません。ただ、待っている人に聞けば、英語で教えてもらえます。

オランダでの生活は2年間の予定のため、6月に3週間のオランダ語集中コースを受講しました。これは、全くの初心者を対象としたものであり、午前中の3時間半、週5日で3週間、合計50時間のコースでした。最初はオランダ語が全くわからないレベルから始めるにもかかわらず、コースの最後には過去形・未来形・比較形などほぼひととおりのレベルを終えるという、大変辛いものでした。

午前中の授業が終われば、事務所で仕事を行われければならず、帰宅してから、毎日予習復習（最後には予習するだけで精一杯でしたが）が続き、寝ている間もオランダ語が出てきそうなほどオランダ語漬けの日々を過ごしたおかげか、終わる頃には簡単な文章であれば、辞書がなくても読めるようになり、会話もなんとなく聞き取れるようになりました。ただ、ヨーロッパ系の言語をネイティブとする他の学生との差は埋めがたく、クラスの中の冗談に1人だけついていけないこともありました。

〈開所式及び共同シンポジウム〉

来る10月24日にグローニンゲン大学本部棟において、当事務所の開所式を行う予定にしています。この開所式には、既にグローニンゲン大学学長、グローニンゲン市副市長及び日本大使館大使から出席のご連絡をいただいており、スピーチをいただく予定になっているほか、本学及びグローニンゲン大学双方の教員が基調講演を行う予定にしています。

また、25，26日の両日に、グローニンゲン大学と共同でシンポジウムを行う予定にしています。このシンポジウムは、文科系・理工系・医学系の3分野から双方の大学の教員が各10名ずつ参加することとなっており、両大学を合計すると60名により執り行われる大規模なシンポジウムとなる予定です。

〈最後に〉

本学が法人化後に導入した大きなプロジェクトとして、この海外拠点を挙げることができます。多くの国立大学においても、法人化後に同様の海外事務所を設置し始めていますが、本学では、アジアには既に生物工学国際交流センターが基礎となる海外拠点を含めると、北米・ヨーロッパ・アジアの多くの地域をカバーできる体制となっており、国際化においては、既に他大学に先んじた印象を受けます。

拠点を開設した直後であることから、現段階での活動内容はまだ限られているものの、徐々に活動を展開し、海外拠点で得られた情報を本学にフィードバックし、本学の国際化、モットーである Grow Globally に貢献できることを大変うれしく思います。

〈大阪大学グローニンゲン事務所〉

Osaka University Office, Groningen, the Netherlands
Zernikelaan 6, 9747 AA Groningen, the Netherlands
Tel : ＋ 31(0)50 363 8865, Fax : ＋ 31(0)50 363 8866
e-mail：info @ osaka-u-groningen.org

〈交通アクセス〉

オランダ国鉄グローニンゲン駅からバス（11 番又は 15 番）で約 15 分、Zernike で降車後、徒歩 3 分。

〈おまけ〉

グローニンゲン（だけではなく、オランダも含め）を訪問される際には次の点に注意してください。

スーパーなどで買い物をしても、現金で支払う場合には、5 セント以下の端数は切り上げ・切り下げをされます。このため、1 ユーロ 98 セントの買い物をして 2 ユーロを払っても、金額は 2 ユーロとして計算されますので、おつりを待っていても何も帰ってきません。「Mag ik de bon？」（レシートをください）と言って、レシートを見ても、合計は 1 ユーロ 98 セントなのに、おつりは 0 となっています。グローニンゲンへお越しの際には一度お試しください（ただし、カードで支払うと額面通りになります。不思議な国ですね。）。

ちせき・まさひこ プロフィール
研究推進・国際部国際交流課
職歴：平成９年大阪大学総務部人事課採用、その後、法学部、文科系事務部へ異動。文科系事務部在籍中の平成１３年９月からはイギリス・ダラム大学へ海外研修制度により１年間派遣。帰国後は、研究協力部留学生課に所属し、今年４月から国際交流課へ異動後、オランダへ派遣。

私の本棚

『ワイル博士の医食同源』

アンドルー・ワイル著
上野圭一訳（角川書店）2000年

世をあげて「食・健康」への関心が高まってきているこのごろ、ええっ、そんなことあるの？というような話も結構多い。例えば、好きなものを好きなだけ食べてやせられるとか、これを食べれば（飲めば）健康になるとか、健康飲料のCMの巧妙なワナ（ちょっと見た目には、飲めばやせるというイメージだが、飲んでやせるとは一言も言わずに必ず運動してやせるというオチになっている）など。なにはともあれ健康の基本は、食べ過ぎないことと適度な運動のように思うのだが・・・

自らのことを申し上げれば、3年ほど前のこと、あまりに増えすぎた体重が気になりだして試してみたウオーキングで、ほんの少し歩いただけで膝が悲鳴をあげることが続き、さらに健康診断の結果も明らかに「黄信号」がともるようになったことがきっかけとなり、いよいよわが身の健康を気にし始めた。幸いなことにその頃めぐり合った「自転車に乗る」という自分にあった運動は続けているが、同じころから「食べること」についても徐々に関心が深まっていった。健康食品、サプリメントなどから数々のダイエット法に

いたるまで、食に関する情報は氾濫しているが、そんな中からお薦めするのがこの一冊である。

本書の項目は、満足な食事の原理、人間の栄養とはなにか、世界最悪の食事、世界最良の食事、体重をめぐる問題ほかであり、「入り乱れた食に関する情報を整理し、食生活に明快な指針を提供する」に十分な読みやすい記述である。決して敷居の高い専門書ではないので、健康について考えるきっかけとなる「読み物」としては最適だと思う。

ちなみに、本書では伝統的な「日本食」への評価は非常に高いが、西洋化の波の中、日本でもそのよさが次第に薄れていっていることへの懸念も示されている。慣れ親しんだ食、あるいは旬の素材の大切さを、いまいちど見直してみたいと思うこのごろである。

総務部総務課　専門職員
川　北　康　夫

編　集　後　記

今年の夏、大阪大学は「帰ってきました！大阪大学」をキャッチフレーズに、初めて天神祭の船渡御に参加しました。また総合学術博物館では、待兼山修学館内の新たな展示室を公開するなど、大阪大学はその存在を学外に向けて大きくアピールしています。

「阪大Now」も、本号から大幅なリニューアルを行った紙面となりました。全ページがカラーとなり、新企画もスタートして、従来の「大阪大学での出来事を伝える広報誌」から、「いろいろな“大阪大学”を伝える広報誌」へ、より一層の充実を目指したいと思います。（瀬尾）

レストラン「ラ・シェーナ」

昨年 12 月にオープンした千里阪急ホテル直営店。イタリアンをベースにフレンチ感覚をミックスした料理が中心。店内には洒落たインテリア小物がさりげなく並ぶ。店名のラ・シェーナとはイタリア語で風景という意味。15 階からの眺望は大阪市内や生駒連山まで見渡せる抜群のロケーション。リーズナブルな値段もあって近隣の主婦層にも人気が高く、常連客も多いとか。お薦めは日替わりランチ。ランチタイムには 70 席が満席になることも。予約しておくと待ち時間なしで食事できる。店長の赤田真二さんは 6 月に交替した 2 代目。アットホームな雰囲気づくりとリーズナブルな価格をモットーにサービスに努めたいと。ディナー、ゲストランチ、各種パーティーの相談にも応じてもらえる。

大阪大学大学院工学研究科 GSE コモン・イースト棟　15 階
営業時間：10 時～ 20 時 30 分。
　　土曜は 14 時まで。日曜、祝日は定休日。
TEL　06 － 6816 － 8411

ホームページ
http://www.senri-htl.co.jp/lascena/

テンセグリティタワー

未来構造物と称されるテンセグリティを、間伐材によって実現したものです。テンセグリティの起源はアートであり、浮遊感のある外観は人々を不思議な感覚へと導きます。「引張材の海に浮かぶ圧縮材」という詩的な表現が使われます。宇宙構造への実用化を目指して世界中で研究されています。専門家でも実現が困難であったものを誰もが簡単に組み立てができる技術を開発したものです。H 17 共通教育の体験的課題追求型授業で製作、組み立てを行いました。　（大学院工学研究科教授 今井克彦、M1 待永崇宏）

交流協定大学紹介

上海交通大学（中華人民共和国）
Shanghai Jiao Tong University

上海交通大学図書館

中華人民共和国・上海市に位置する上海交通大学は中国教育部に直属しており、教育部と上海市が共同で管理運営される中華人民共和国の重点大学の一つです。その前身は、1896年に創立された南洋公学で、中国で最長の歴史を持つ高等学府の一つです。1959年上海交通大学に名称変更し、2005年7月18日、上海交通大学は上海第二医科大学と合併し、新しい上海交通大学となり、同時に、新しい上海交通大学医学院も設立。

学生数は、現在全日制の在校学生が約38,000人。そのうち、学部生約18,000人、大学院生18,100人、留学生1,800人です。

教員数は、現在常勤講師約2,800人です。

研究の面では、大学の研究費は5年連続で国内大学の3位。発明の特許申請数も上昇中、2004年は中国国内大学の首位です。2003年SCIに収録された論文数は1,163通で、全国大学ランキング6位。EIに収録された論文数は1,441通で、連続全国大学ランキング2位となっています。

上海交通大学とは、1994年に大学間交流協定を締結して以来、毎年、テーマを決めて、本学と同大学の間で交互に企画・実施を担当し、学術交流セミナーを開催しています。今年度で10回目を迎えます。

今年度の学術交流セミナーは、インフォメーション（51ページ）参照

所在地：中華人民共和国上海市華山路1954号
（〒200030）
http://www.sjtu.edu.cn/

上海交通大学正門

阪大Now　No.84　2005.8

編集・発行　大阪大学広報委員会（総務部評価・広報課）　〒565-0871　大阪府吹田市山田丘1-1
電話：06（6879）7017　FAX：06（6879）7166
ホームページアドレス　http://www.osaka-u.ac.jp

「阪大Now」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。
E-mail：soumukikakukouhou@ns.jim.osaka-u.ac.jp

この冊子は人類環境浄化のためのエコー認定の再生紙を使用しています。
000530